

絶好の機會！

大僧正故本多親下最近の名著四種左の通り特價提供す
吉因共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

- 一 法華經要義
定價 金 參 圓
送料 十 四 錢
- 一 日蓮主義心髓
定價 金壹圓八拾錢
送料 十 錢
- 一 日蓮主義精要
定價 金參圓五拾錢
送料 十 六 錢
- 一 日蓮主義本領
定價 金貳圓五拾錢
送料 十 二 錢

今月中に限り一部實は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引 送料は實費を申受く

申込所

東京市外南品川町妙國寺内

「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

聖應院日生上人追悼號

統

一

號月六年六十三第

價定一統

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
事之金前		

料告廣一統

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓
事之金前	

昭和六年四月廿四日印刷納本 (第四百三十四號)
昭和六年五月一日發行

製複許不

神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地一四八
編輯人 磯部滿事
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京府住原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所 都 郡 電話高輪六〇二四番

發行所

統發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

振替東京五一〇七一番

統

一 第三十六年第六號 目次

◎卷頭の辭

日生上人を追憶す
 本多日生師を憶ふ
 噫本多日生上人の遷化
 獨立獨行剛健の教傑
 追懷うたゝ切なり
 あゝ日生上人
 悼 歌
 本多日生上人を追懷す
 本多日生大僧正を想ふ
 思ひ出の何やかや
 本多日生師を想ふ
 本多日生上人の遷化を悼みて
 日生上人の特長

顯本法華宗管長	日蓮宗管長	權大僧正	國柱會	慶大教授	文學士	文學士	男爵	文學博士	教化團體理事	文學博士	神宮奉齋會會長	陸軍大將	子爵	磯部滿事
井村日	酒井日	鈴木日	川智日	山一應	柴田能	加藤文	井上清	井上純	井上哲次	加藤咄堂	境野黃洋	今泉定助	大迫尚道	小笠原長生
二	五	七	〇	三	五	八	九	〇	二	六	七	七	七	一

本多上人を慕ふ
本多日生上人を悼む
本多大僧正の遷生を悼みて
本多日生上人の遷化を承りて
恩師紀念
本多大僧正を憶ふ
日蓮聖人大師號宣下と日生上人

海軍中將 佐藤 阜藏……………三〇
法學博士 下村 壽一……………三三
陸軍中將 井上 一次……………三三
陸軍中將 四王 天延……………三五
海軍少將 岩野 直英……………三六
海軍中將 佐藤 鐵太郎……………三七
財團法人立正會理事長 宮原 六郎……………四七

日生上人宗葬記

聖應院日生上人御本葬儀記

弔	辭	文學士	河合 陟明……………四九
弔	辭	文部大臣	田中 隆三……………五五
弔	辭	日蓮宗管長	酒井 日慎……………五六
弔	辭	國柱會總裁	田中 智學……………五六
弔	辭	法學博士	山田 三良……………五九
弔	辭	統一團協贊會理事長	宮原 六郎……………六〇

◎編輯室より

卷頭の辭

『日蓮はいづれの宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず』と云ひ、正直に如來使として如來の事を行ぜられたやうに、聖應院日生上人は復僧籍は日什門下には在るが、敢て一宗一派の日生上人ではなかつた。佛教界に於けるのみならず苟くも我れは日本人なりの觀念に燃えて居る士女にして、日生上人に親炙敬慕せざる者はない程、廣く社會からは信頼されて居られた。法國冥合の大理想は、日蓮聖人以後日生上人に仍て漸く事實化せんとした、知法思國會の活動はそれ一のである。晩秋露をあびて都大路に師子吼された日生上人は、立正大師以上のあるものを想はしめられる感もした。或は晩年靜かに人を避けて禪定に入り、終日寢食を忘れたやうに深き冥想に入られたこともあつた。學業修練を積まれた後に於て入山の機會を得られなかつた日生上人は、嘸もの足りなく思召したのであらう。立正大師の佐渡、天台大師の天台山生活が日生上人に在つたらばと、心ある人には深くこれを思はしむるが、それをこの兩三年里にあつて行はれて居た、その時の心に練られた事こそ眞の日生上人そのもので、永遠に輝く日生上人であらう。今後十年此土に於て大に佛事を成ぜんとして急遽本佛釋尊の御召還により旅立たれたことは、我等の本心を覺醒せしむるにはあまりに大きなお慈悲と思ふ、吾人何を以てか之に報答し奉るべき。

今や本葬が宗儀を以て行はれようとする時、本誌は茲に、日生上人御生前中法國の爲め上人と提携されてゐた諸名士から、御繁劇中にも不拘特に御感想を頂いて尊靈に供へ、俱に共に謹みて悼み奉ると云爾

(滿事謹記)

南無妙法蓮華經

日生上人を追憶す

井村日威

今回師範日生上人の葬儀を宗葬の禮を以つて執行せらるゝことに決定發表せられたことは、遺弟たる自分として大に感謝する次第である。上人の遷化せらるゝや誰言ふとなく宗葬になるであらうとの事が傳へられ、密葬の直後には妙國寺の檀家總代人の一人より宗葬として取扱はるゝ様にとの希望申出を受けたが、自分も衷心然かありたいとは希望はして居つたが、弟子としての立場から其主唱者たることは差控へねばならぬと考へて、遠慮して宗葬問題に觸るゝことを避けて葬儀は自己人の全責任に於て其始末を爲す豫定で事を運んで居つた次第であつたが、自分が三月末より地方巡教の爲め出發の後に於て、宗門の内部に於て宗葬と爲すべしとの輿論の聲昂まり、遂に四月九日の宗務廳會議に於て宗葬執行

の事に應議決定の旨上申せられた。仍つて直に宗會議員に諮問し一致の協賛を得て宗葬の事に決定した次第である。斯様な次第で今回の宗葬は全く宗門の輿論の一致した結果であつて、上人の徳望が如何に宗門の重きを爲して居つたかを證明するものであると信する。

由來英雄豪傑の事業には多少の無理押は有り勝の事で、其反面から見るとは犠牲者もあれば非難すべき點の伴ふことは止むを得ざることである、故に兎角の批評は免るゝことは出来るものではない。

日生上人が當代の教傑として宗門の改革を企て僧風改善の爲に努力せられたる反面に、可なりの反感があり非難あることも亦止なき事であらう、此を以つて直ちに其効績を没却し去ることは其當を得たものではない、左ればとて其功業に眩惑して、無條件に其全部を神聖視することも、過ぎたるは尙及ばざるの感なきにしもあらずであらう。自分は今回の宗

葬執行の應議決定に對し、此を宗會議員に諮問するに際し、其理由として擧げたる條項は、兎角の批評ある問題と避けて、何れの方面より見ても非難すべき點なきもののみを數へて其効績を認めて宗葬執行の理由と爲したのである、其理由の第一としては、

教義信條の整束

である、中に本尊問題の解決が最も重要なものである、日蓮主義は中古已來檀林制度の爲に累せられて、天台學の爲に其精髓を失ふに至り、所謂天台の袋擔ぎを甘するに至り、日蓮聖人の主張は殆んど其影を薄ふして居つた、其處に教義信條の亂脈を來し混沌たる状態に陥つて居つたのである、此が整束に最大の努力を拂はれて、日蓮主義の教義信條を明確にせられた事は、教海に樟すもの、爲には實に暗夜の光明であつたのである。殊に本尊問題に就ては、天台の實相觀に四はれて、題目中心の思想が可なり強く、爲に本尊意識の明瞭を缺き、立宗已來七百

年に及んで尙且つ本尊問題が論議せらるゝ程左様に不透明なるものであつたに對して、人格中心の本尊觀を提唱し、壽量開顯の本旨に依り、久遠實在の本佛釋尊を以つて歸依渴仰の中心と定め大慈悲感應の源泉を明確に把持せしめられたことは、但に日蓮主義の本尊觀のみならず、佛教全般に於ける本尊問題解決の鍵鑰を示したものである、佛教統一の大本尊として本佛釋尊を仰ぐことに於てのみ佛教存在の意義を有するものである。日蓮大聖人が佛教統一の大理想も茲に存して居るのである、末學小智の輩が此點に留意せずして、但其末梢を争ふて居つたのは洵に愚の至りであつた。此點を看破して釋尊中心の思想を鼓吹したのは先師日生上人の最大法動であり最大偉績である。

新しく申す自分も多年宗内先師の著述を渉獵して適切なる信解を得ず、小林日至師の會下に參して得ること能はず、煩瑣懐疑の中に日生上人が本佛中心の本尊觀を主張せらるゝに及びて始めて宗教的信念に入り得たのであつて、今日自分が信仰生活に就て多少

の理解を得たことは全く上人の主義に依つていあることを明白に申上げて置く、尙本尊問題に就ては今後一層明瞭に爲し置ればならぬ點があると思ふ、其大綱は既に示されて居ることはあり、一般にも餘程理解せられて居る事ではあるが、此際本問題の徹底を計ることが遠隔たる我々が上人の洞見に依ゆる所以であるを信じて、去る四月本山遠忌に引續き講習會を開いて「本尊深義」の題下に本問題に就て聊か愚見を發表した次第であります。

次は

統合問題の提唱

である、理想として御門下の統合と云ふことは當然であらねばならぬ、爲さねばならぬ事は言ふまでも無い事ではあるが、六百年來分裂の歴史を有する各教團が、簡単に統合が出来ることは考へては居らなかつたではあるが、縱令成功はせぬ迄も其氣運を促進することを必要と考へて主唱したものであらうが、此問題の提唱は確に御門下一同をして周障せしめ其無準備なることを暴露したのであつた。果せるかな、其結果は不成功であつた、不成功ではあつたが御門下一同をして統合事業の必要であり、爲さね

子吼の賜である、日生上人の辯論は超努級經の最大備砲の威力を有して居つたのである、今や此巨砲を失ふ將來の寂寞思ふべしである、又終生を通じての大努力は

僧風の刷新と道念の振起

である、明治維新當時の教界は廢佛棄釋の妄舉に崇られて殆んど收拾すべからざる混亂状態に陥つた。或宗の高僧は還俗して神官と早變をした、或巨刹の主職は寺寶を典賣して夜逃をした等で、佛教界は殆んど其體を爲して居なかつた、此に憤慨して起つたのが日生上人の師範日容上人であつた、其薰陶を受けた上人は壯年より僧風の刷新道念の振起に努められた、今日顯本法華宗が佛教界のその多數に比較して活動的であり道念的であることは此努力の爲である、一般佛教界も日生上人の活躍の刺激を受けて活動的に變遷しつゝあつた事も事實である。今回の遷化に際し自他宗共に其遷化を惜んだ事は實に其點で

ばならぬ事業であることを理解せしめた丈の効果はあつたから、夫れだけ成功と言はねばならぬ、次には

証號宣下の奏請

である、各教團に率先して本問題を提唱し、各教團管長并に崇敬者の連署の下に大師號宣下を奏請し、御嘉納あらせられて、「立正大師」の証號を宣下せられたる事は、特に日生上人の努力多きものあることは今更申す迄も無い事である、次は其生涯を通じての

講壇に於ける大師子吼

である、其量に於ても其質に於ても、巧説無礙の辯才を以つて縱横に師子吼せられた、教義的布教に於ても社會教化の運動に於ても勞働者善導に於ても、所有方面に行くとして可ならざるなく、當代知名の士をして日蓮主義に接觸せしめ、世人をして日蓮主義の輪廓を知識せしめたることは全く日生上人大師

あつたのである。

以上列挙したる諸點は何れの方面より見ても非難の無い眞實の効績として認めらるゝもののみを挙げたのである、今回統一誌が上人追憶號を發行せらるゝに際し、此文を上人の御前に捧げ追憶の一端と爲すものである。(一六、四、三〇稿)

本多日生師を憶ふ

酒井日慎

本多日生師遷化の報に接して、驚き且つ悲しみ、全く言ふ所を知らないものである。近世日蓮主義の興隆が、師に負ふ所極めて多きは、今更言ふまでも無い。高邁なる識見、潤達なる豪氣、以て常に新生面を開拓し、本化の教風を宣揚せられたる教績の偉大なる、實に、日什上人の門流に於て、古今に獨歩すと稱しても然るべきであると思ふ。單

に什門のみならず、通じて、御門下の全歴史の上でも、師ほどの教養は、多くは発見し得られないのである。生前已に歴史的人物たるの定評があつた。棺を蓋するに至つて、その偉大なる法動は、ますます輝き、宗實たる歴史的價值は、長に定まる。然し、再び生身の師を見ることの出来なくなつた今日、別して、時悪人悪の淺狭しい世相を眺めては、師を追慕するの情は、いよ／＼深きを加へ、何ともいへない淋しみを痛感する次第である。

最近、師と親しく面相接して、その高見に傾聴したのは、知法思國會創立の相談を受けた時であつた。何時も變らざる攝化の熱心は其時も、師の眉宇にあらはれ、予は、その熱誠に感激して、及ばずながら微力を致すべきことを約したのである。然し、當時、幾分日頃の英氣が缺けて居られたやうに印象せられたので、尙に師の健康を憂慮してゐたが、かく俄かに遷化せられようとは、全く豫期せなんだ處

として感謝せらるべき人である。また、顯本法華宗の管長として、三十年近くも在職せられたる間に、同宗の綱規を肅正し、信仰を統一し、弘通本位の宗門たるの面目を新たにし、宗門統制の模範を示された。各教團は、ここにも學ぶべき多くのものを發見するのである。

その筆力は縦横、その辯舌は無礙。等身の大著述、萬座の大説法、光前また照後、たゞ欽仰すべきのみである。師の教學は、そのまゝ全部を承認することは出来ないとしても、主として現代思想を對手として、日蓮主義の現代的發揮に力められた苦辛の存する處は、大に感謝せねばならないのである。教義の解釋の容れ難きを以て、直ちに師を論難せんとするものあらば、是れ師の心を理解せざるものと言ふべきである。

「統一」誌が、師の追悼號發行に際し、特に請はる

である。

回顧すれば、師に就て語るべきものは頗る多い。就中、大師號宣下の奏請に、第一の發願者であり、また最後までの盡力者であつたことは、御門下の一員として、永く忘れることの出来ない處である。また、各派統合に肝膽を擡かれたことの如き、それは時機到來せずして不幸成功を見なかつたとしても、永久に語り傳へうるべきものである。天晴會、地明會が、新人男女を網羅して、日蓮主義の社會的進出に寄與せることの大なる、統一團が、教戰の本陣として、幾多世出の双功を立てたる等々。數へて盡さない。

四大格言の強議に於ては、一步も退かなかつた剛毅の精神を持ちながら、率先して、三教會同の肝入をせられた如きは、變通自在なる師の一面を語る。法華開顯の妙義に立脚して、國民教化の爲めに奮闘せられたる如き、社會教育全般の上からも、大恩人

と、僅かに感想の一端を披露した次第である。

噫本多日生上人の遷化

鈴木日雄

宗教家として世に立つには無論博覽強記でなくてはならぬ、又辯論能く人を動かし能く人を引付けることも必要であり、又文筆縦横に其所見を論述するの能力がなければならぬ、併し何よりも一番大事のものは道念であらうと思ひます。道念の下に衣食ありと云ふことを能く聞かされてゐますが、衣食の資は我々が人世に處する上に於て一日も缺くことの出来ざるは申迄もなきことで、衣食の資は道念の在る處に必らず追隨するものたることを深く味得するものでなければ、眞の宗教家として世に立つことは出来得ないと思ふ、道念なくして信念の起る筈もなく隨て行學二道に精進する心にもなりませんから、

宗教家としての素質は學識辯論文筆よりも道念堅固が第一の要素であります。宗教家の中には相當の學者もあれば、又辯論の達者の人もあり、文筆堪能の人に乏しくありませんが、只だ道念に至っては平常口癖に唱道する割合に其有無を疑はれることが随分多數ある如く見受けまします。學識辯論文筆に堪能の人必らずしも道念堅固とは斷定できません、宗教家として自然頭の低るのは其人の道念の點であります、之れは餘り偏傾した觀見かも知れませんが自分の直感には斯く思はれます。

本多日生上人が本年三月十六日遷化されました事は、教界及び思想界に淋しさを感ずることは莫大でありませうが、特に我宗團に取つては殆ど其中心を失ひし如く、人の魂魄を失ひし如く家の柱が倒れた如き氣がして、何とも言ひ得られない感じが致します。是れは故上人に接近して教を受けたものは、僧俗の別なく一般に其感を同ふすること、思はれま

出家入寺するものは、両親のなき孤兒か若くは両親が生活難にて養育する力なく、止むなく寺院に投じて剃髮せしむるのが多いので、自分の子を坊主にでもすることを聞くこと、之を嘲笑唾棄したもので自分等も其時分は未だ出家する心はありませんから、之を嘲笑した一人であります。今日から考へると眞に想像以外でありました、然るに上人の両親は當時相當の資産を有せるにも拘らず、出家せしめられまして、尤も故上人の両親は淨土宗でありました、感ずる所ありて、本宗に改宗され上人が母胎に妊娠中に両親が若し男子が出生すれば出家得道せしめんと意思でありましたので、上人も亦少年時代より一日も早く出家せんことを望まれたので、両親は今兩三年経過して入寺しても遅からずとの意向であつたのが、上人は其れを聞かすして丁度小學校を卒へると十三歳で入寺されました。入寺以後は毎に頭髪を

す、何とせよ宗團の大損失に違ひありません。自分は故上人が出家以前小學校時代已來長年月の間の知り合でありましたから、上人の遷化に對して一層に悲哀の念に堪へぬ次第であります。故上人が壯年時代より晩年に至るまでの活動振りは、普く人の知悉する所でありましたから他の諸賢の方々より遺漏なく紹介されませうから、自分は故上人が幼年時代に於ける動作に就き一二述べることに致します。

明治十一年の頃故國姫路市城東小學校に於て、自分も同學校に在て而かも同級生でありました上人は、年齒十二三歳の少年でありましたが、學校から家に歸ると直ちに同市五軒邸妙善寺に到り、同寺の老僧本多日境師に就き頻りに法華經の音讀を習學されました、一日たりとも之を怠らす約半歳の間に法華經全部の音讀を習了されました。十一二歳の幼年時代に出家得道の志を抱き入寺以前に既に法華經の音讀を習了されたのであります、當時少年にして

剃りて日常法服を着けて肉食等は一切致されません、時折両親を訪れても両親も入寺せざる以前は吾愛子であるけれども、既に出家入寺すれば吾子にして吾子に非ず、佛弟子であるから吾子扱にせず、名を呼ぶにも敬語を用ゆる様にして居られました。上人は姫路妙立寺に於て池田日昌上人に就き得度式を擧げたのであります、不幸池田日昌師は間もなく遷化されましたから、其後兒玉日容師に就て學ばれたのであります。此時代を追憶すると上人は少年ながらも最も眞面目で、能く規律を遵守し行學に精勵されました、少年の時代から恰惻で意志の強かりしこと其風貌が何處となく威嚴がありました。

兒玉容師に就て行學大に進み、十五六歳の時代から高座に昇りて説法教化されました、此時分に老若男女を集めて説法されましたのですから、最も平易の因縁故事を談じて法門の極意を説かれたので、之を聴くものは能く分つて難有とて仲々の評判であり

ました。人を感化することは六ヶ敷きもので現代壇上（壇上）に立て布教する方々の所感（所感）を聞いても、真に聽衆を喜ばして信仰（信仰）を發起せしめることは、一片の言論だけで其効績（効績）を擧げることの容易ならざるは、其任にある人は能く經驗されてゐることでありませう。然るに故上人が十五六歳の若年の時代に、其説法を聞いて續々信仰（信仰）を起すものありしは眞の事實でありませう、是れは上人が若年の折から智識も人に優ぐれ、辯論も若年に似合す雄辯であり、又此他にも種々仔細がありました事と想像されますが、併し自分は上人が少年時代から道念が終始一貫してゐること、道念の堅固なること、道念が充實して、それが言論に動作に現はれて種々の方面に開展された結果であると思ひます。

何故に其道念が少年時代から堅固であつたかと云ふと、少年時代に出家得道（出家得道）されました其發心の動起が、真に純潔で人に勧められて止むなく出家された

獨立獨行剛健の教傑

山川 智 應

本多日生上人は、私の心ひそかに敬重しつゝ、ある近代の教傑である。師は獨立獨行の性格で、線の太い剛健なる人格で、その爲さんと欲するところを爲し、そのいはんど欲するところをいつて、毫も憚るところのない、極めて自信の深い人であつた。明治大正の時代において、顯本法華宗が日蓮聖人門下に、鬱然として一頭地を抜いて既成宗團たり得るのは、まつたく師の存在によつてである。顯本法華宗の本多日生師ではなくて、本多日生師の顯本法華宗なのであつた。

吾等の恩師田中智學先生は、師をもつて開祖日什上人以來、顯本法華宗の第一の偉人であり、日什上人の再來ともいふべきであるとせられるが、吾等もまたその感なきを得ない。その獨立獨行の氣魄においても、その終生宣傳にいそんで身の勞苦を忘れられた點においても。たゞ什師には著述がないが、師は「法華經講義」

ものでもなく、利害得失の打算的から出家の志を起せしにもあらず、佛道に入りて學者たらんとするの志から發心されたのでもありません。今自分が其發心の動起を付度すると、佛弟子となりて佛道に精進するのが人生に是れ以上の幸福なしとの純潔の思想より出でたものであらうと思ひます、發心佛越萬行徒施と云ふことがありますが、上人が後世宗教家として偉大の効績を残し、各方面の人々から崇拜されて痛惜止まざる所以のもの素より上人の實力の然らしむるものに相違ありませませんが、其實力の因て生ずる所は上人の出家得道の動起が純潔でありしこと、又道念堅固なりしことが今日の結果を生むに至りしものと思ひであります。（昭和六、五、五）

「聖語錄」「大藏經要義」「聖訓要義」「日蓮聖人正傳」以下十數部、もし未刊の講演類をまごめられ、ば、まことに數萬頁を算するであらう。その精力の旺盛なる、たゞ驚嘆するの外はない。

二

師の獨立獨行は少壯にして小林日師と共に、妙満寺派寺院から飛び出して、顯本宗學會の母胎となつた講義所をはじめられた時から始まり、知法思國會の活動をもつて終らるゝまで一貫してゐる。統一團、統一閣、天晴會、地明會等は、みな師が中心勢力たらざるものなく、明治後半期から大正中期にいたる日蓮主義の勃興は、一般的には高山樗牛博士の提唱が大なる衝動を與へたに因るけれども、各社會の人士をどれだけの程度において、廣く日蓮主義に結びつけたのは、師の天晴會であり、また講義會であつたらう。その點からいふと、明治大正の日蓮主義運動において、深く日蓮主義についての開拓

をした人を田中智學先生としたならば、廣く社會的知名の人士を關係せしめた人は本多日生上人であつたのである。

師はまた日蓮主義の思想的方面においても獨立獨行せんとする人であつた。その「開目抄」第一書の主張は、遠く合掌日受師を推賞して居られるが、その毒量品の本佛實在の信仰をもつて「本尊抄」の觀心面の思想、大曼荼羅の佛菩薩羅列を不要とさるゝ態度は、古來の日蓮聖人門下の人々が、容易にいひ得ないところで、師が宗教學上の識見からの主張であるが、吾等はそれに賛同し得ないに保らず、この説を爲さるゝ師の心事にはふかく同情し、敢然とこれを唱ふる丈夫兒の面目は痛快とするものである。

三

師は歌をよまれず、詩を作られず、俳句、繪畫いづれも嗜まれたやうに聞いてゐない。その方面には甚だ無趣味の人であつたやうであるが、しかも剛健

られ、折しも恩師は御不在であつたが、長瀧智大法兄と私とが御接待した。その時、しみじみと、田中先生や自分が萬一の時は、その後を承けるものが誰があるかなど語られ、師が少時志を立てられた時の實歴談をして、近時の青年が節義と氣概に缺けてゐることを嘆かれたのであつた。自分は近時あの時の師の遺徳を追懐して、常に藥餌に親しまねばならない不甲斐なさを齒がゆくおもふことがしばしばである。

今や我が思想界は、いまだ嘗て遭遇しなかつた困難に際會してゐるといつてもよからう。かゝる時に師の遠逝に遭ふことは、まことに宗門と國家との大なる損失である。だが、師の著述とその獨立獨行の剛健なる氣魄は、かならず後より來る者に大なる影響を與へるものがあるのみでなく、師の親しく訓へられた信者諸君、その残された事業は、師の精神をなほ活けるが如く繼承して、法と國とに永久の光り

潤達な性格は、演劇などにもよく感ずる方面も持つて居られたやうである。そして嘗ては青年を愛して、單稱日蓮宗の人なども、師の教を受けた人が決して少くはなかつた。佐藤中將が師をもつて「荒けりの仁王」の趣きありとせられたのは、たしかに師の一面を表現した語であらう。

師の生存中に爲された事業と、出遣はれた事から就いて、いまだに遺徳に感ずることが二つある。その一つは、あの大正四年五年にわたつた、日蓮聖人門下の統合問題であり、他の一つは、師と吾が田中先生を故清水梁山師との三人同盟で、そのいづれもが成功までいたらなかつたことである。若しこの二つの中、一つでも成功してゐたならばとおもふことが屢であるが、これは蓋しまだ時の至らぬものであらうとおもふ。

四

師はかつて大正六七年の頃、三保の最勝閣に立寄

を發せらるゝであらうことを信じて疑はないものである。

謹みて、聖應院日生上人の遠逝に、深厚なる哀悼の誠意を表し、四十餘年不斷の教光に對して、敬意を捧げるものである。

追懐うた、切なり

柴田一能

一、御遠忌と本多上人

五十年目一度の大聖人の御遠忌に値ふことの有りがたいことであるとは、我々師徒の間に言ひ交はされてゐる言葉であるが、目前本多上人の御遷化に遭つて、今更のやうに御遠忌に値ひ奉りつゝある我々の光榮を感謝せずにはゐられないのである。

併し我々のは唯御遠忌をお迎へして、報恩の大法要とか寺塔の改築修繕とか記念の講演とかが關の山で、五十年一度と言ひつゝ、殆んど無意義に通過して

仕舞ふのではあるまいか。斯うなると何と云つても本多上人である。出る杭は打たれるの道理で、何か仕事をすれば善かれ悪かれ天下の批評は免れない。それにも拘らず、敢然として自己の信する所を一文字に遣つてのける所は他に追隨を容さない。普通の年であつても上人の遷化は惜まれるに相違ないが、御遠忌年であるだけに上人在しなばと狂子が醫父を慕ふ毒量品の經意が莽々と胸にこたへるのを覺へる。

二、教團の統合如何

端なくも想ひ起されるのは先年目論まれた御門下全教團の統合事業のことである。當時自分も若輩ながら上人の驥尾に附して東西に奔走し、南北に馳驅したものである。各教團の先輩中の先輩とも謂ふべき上人を始め、脇田、清水(梁山)師に田中智學居士を加へて所謂御門下の四天王と云ふ格で、之に小笠原、佐藤、大迫、林等の陸海軍の各將星を筆頭とし

定的統合を見たのみで事實未成に終つた。此時若し上人に管長の肩書がなく、單に御門下の一弟子として名乗り出られたならばと、後悔は常に先には立たなかつた。

三、日蓮主義の宣傳と上人

統合運動は失敗に歸したとしても、大體日清戰爭前後から俄然『日蓮主義』の叫びを掲げて先づ以て有識階級の注意を喚び、別して青年學徒の間に日蓮聖人鑽仰の機運を醸したのは四天王の力で、就中『天晴會』『地明會』其他異名同質の鑽仰團體が全國的に蜂起するに至らしめた原動力は故上人に歸せざるを得ないと信するのである。

思想國難の連呼されつゝある今日、而も五十年目一度の大遠忌に直面した今日、上人若し健在であつたならば、必ずや花々しい最後の活躍を試みられたであらうに、時正に三月彌生、病床徒らに花信を夢みて、萬斛の暗涙と共に化を他界に遷されたこと

て姉崎、笹川、志田、境野等の學者、山田、矢野、牧野等、法曹界の名士等の聲援で、聖祖滅後六百年來教團分裂のために法國冥合も四海歸妙も永く理想に止まつて、之を實現するの機運に際しなかつたのである。各派統合の必要は恐らく教團に籍を持たない在俗インテリゲンチヤの方面から唱へ出されたものであらうと思ふが、之を機として奮起し、自ら其衝に當るの概を以て各教團僧俗の間を縦横に馳せたのは實に上人であつて、日蓮主義の統合は『今正是時』との確信を持たしめたのは主として上人を始め四天王の言動そのものであつた。自分や山田一英君等が所屬の教團から『本多の提燈持とは何の樣ぞ』と非難とりつてあつたけれども、最後の目的さへ成し遂げさへすれば毀譽褒貶何かあらんと、馬車馬的に突進したものであつた。

併し事は志と違ひ、時未熟の故か、先輩の苦心も我々の努力も遂に酬はれず、僅に教育と布教の暫は、如何ばかり残念であつたか、想ひやるだに胸塞がり息苦しく覺へるのである。況んや上人としては恐らく病苦以上の苦痛であつたであらう。

併し上人としては我々凡慮の及ばない、悟道の妙境に安住して『時を待つべきのみ』と心靜かに三昧に入られたのであらう。一切に本佛大慈の御計らひに一任して圓寂せられたものであらう。聞ならく田中智學居士國柱會下の青年團を率ゐて身延山下に法陣を張り、十字街頭、大獅子吼の武者振り勇ましと、上人の靈は果して如何に感ぜられつゝあるであらうか。

あ、日生上人

末學 加藤 文雄

本多日生上人御遷化のことを傳承したのは湖南葉山の地に於てであつた。またしても病を得て寒氣に堪へず、暖くなる頃までといふので、萬縁を謝して

業山に静養してゐた身には、上人の御遷化が、如何に悲しく感ぜられたことであらう。

「あゝ上人も遂におなくなりになつたか」と思うても、なんだか夢でも見るやうな心地。あの活々とした上人、燃ゆるが如き信念の人であられた上人の平生を知るものにとつて、上人の御遷化は全く夢としか思はれないであらう。

學殖の深き、識見の高き、教化に熱心なる、弘通に止暇斷眠なる、教傑として、國士として、上人の法勤教功は、餘りに多く世間に宗門に知られて居る。今更それを語るのは、私の任でないと思へる。私は、上人に私淑せる一書生として、また上人の教導を蒙つた一學徒として、多くの感想の中から、ほんの一二を採つて、上人追慕の情を展べたいと思ふ。

私の中學初級時代、宗友會といふ宗義研究會があつて、代表的學匠が集り、盛に宗教上の論戰を交へられた。其席に、私は先考の命によつて、御給仕役

を勤めさせて頂き、茲に上人の風貌に接するの機會を與へられたのである。勿論一介の少年給仕は、上人から御言葉賜つたわけではないが、その何となく人を壓する威嚴に打たれて、心窩かに畏敬して居つた。其頃、龍口の夏期講習會を初め、各種の大會には、先考に連れられて、末席に列することを得、自然、上人の感化を與へられる機會は多くなつた。

東京の帝大に入り、同志と俱に、樹治會と稱する聖祖鑽仰の團體を創立するに至つて、上人を、正講師として屈請し、法華經又は祖書(特に開目抄)の講義を拜聴するやうになつてから、私は上人會下の一學徒となつたわけである。當時の上人の講義が、深く若き學生を感激せしめたことは申迄もない。私も、當時にあつては、上人の教學觀から最も強い影響感化を蒙つた一人であつた。其の後、日蓮聖祖の人格に關して、上人の御説には服し難いものが胸奥に秘めることを發見し、上人の教授せられた處とは異つ

た立場に於て、卒業論文「久達の日蓮」一名「本化聖身論」を書いたのであるが、上人を尊敬し欽仰する點は、少しも變らなかつた。

學校を出てから、上人と最も親しく接するの機會を得たのは、統合同題再燃の時であつた。開宗六百年五十年當時の統合同題は、少年の身であつたから、希望に燃えてゐた以上に出づる由もなかつたが、第二次の統合同題の時は、上人初め、田中智學先生、故清水梁山上人等の御指導の下に、夜の目も眠らず働かせて頂いた。然し、それは、不幸にして成就しなかつた。それと前後して、天晴會は、上人を中心として朝野各方面の名士を網羅し、私は日宗新報記者として毎回出席し、上人の高話を拜聴することを得た。最近、天晴會の延長とも看るべき知法思國會の創立に際して、私にも、來り投することを懇通せられ、私は悦んで之に馳せ參じたのであるが、間もなく極度に健康を害して、毎回缺席又缺席、遺

憾に思ひながら、どうすることも出来ず、静觀して永き日を過ごして了つた。そこに、突然の訃報である。驚きと悲しみと、全く言ふ所を知らないのである。

各地の講演にお伴をさせて頂いたことも一再ではない。

何時も私の體が快くないので、上人も常に心配して下さつた。そして、こんなことを仰せられたことがある。

「俺も、若い時分には弱くて瘦せてゐた。血を吐いたこともある。が、信仰で鍊へた結果は、この通り丈夫に元氣になつた。君も折角精進し玉へ。體はキツトよくなる。」

この有り難い御言葉をいただきながら、私は、年己に初老に達して、活動思ふにまかせず、意氣のみ旺にして、體力伴はず、罪業の深きを思ふて慚汗を禁じ得ないことは、實に残念千萬である。

上人亡き後、その志を繼ぎ、その芳躅に忝ふことなきの人は、蓋し少くはないであらう。たゞ、私は、私自身、上人の萬一にも及ばないことを、上人の知遇に對しても申譯無く感ずる次第である。

春光照々、陽氣も暖くなつて、今、私は湘南の地を引き上げて自房に歸つて來てゐる。せめて御本葬には參列拜香致し度いと思ふてゐる。

蕪言、上人の尊靈に對して恐れあれど、統一誌の許されるまゝに、思出を記して永く上人を憶念し奉る。

南無聖應院日生上人、增圓妙道位隣大覺。實地壯嚴報恩謝徳。南無妙法蓮華經。

(芝双椀容月庵にて謹記)

井上清純

聖應院日生上人追悼號御發行に付感想認む可き御指示を蒙り候處萬感先づ塞り何ものも書けず

本多日生上人を追懷す

井上哲次郎

本多日生上人が本年三月十六日を以て遷化せられたことは實に意外でありました。後で聞けば突然の事ではなく、昨年來健康を傷はれてあつたと云ふことである。併し自分は一向そのやうなことを知らないうで居つたからして訃報に接し、驚かざるを得なかつたやうな次第である。一體上人はお見掛け申した處では體格も立派で如何にも丈夫さうであつた。それに年齢を云へば自分より十二歳も少なくなつた。それでまだなか／＼他界せらるゝやうに豫期して居なかつたのである。然るに事實は豫期を裏切つて上人が本當に亡くなられたので法華王國が俄に寂しくなつた感あるを免れない。上人の如きは法華王國になるべからざる龍象であつた。然るに永久上人の師子吼を聽くことの出来ないやうになつたのは遺憾の

左の和歌を以て聊か哀悼の辭に供へ申候

聖應院日生上人御遷化の日

なき父にわかれしきやうもおぼえぬよ

かなしきなみだごどめかねつゝ

日生上人を悼む

西山にかくれしひじりしたひつゝ

よを教へんと雲に入りけり

統一五月號を讀みて

つらなりし法のむしろにつゆばかり

たかふことなき文を見るかな

御遺書を拜して

法の庭もれにしことのかなしさも

ふみ見てそゝる心行くなり

品川の現滅

春なけばこゝろ月にしすみぬれば

いるやまもなくいづる雲なし

至りである、

上人は實に精力絶倫の人であつた。曾て大藏經全部を涉獵して、其中最も重要なもの約一千巻を摘出し、其要義を講述し、名づけて『大藏經要義』と稱し、之を世に刊行されたのであるが惜いことには未完本である。併しそれにしても第十一巻まで刊行されて居るので凡そ五千頁になん／＼として居る大部の著書である。精力絶倫の人でなければ決して成し得るものではないと思ふ。さうして又上人が此書を著はされたる動機に至つては大に壯とすべきものがある。第一巻撰述の旨趣の處に主なる動機が三點あるとして

(一) 佛教の妙旨を世人に領解せしめ。

(二) 日蓮主義の大主張を明かにし。

(三) 法國の恩に報じて佛子の萬一を竭さんとす。

此三點は上人終生の志願であつた。此志願を達するが爲に如上『大藏經要義』を著はされたるのみなら

す其他講演に論文に事業に多年拮据努力されたのである。

上人は單なる學究ではなかつた。なか／＼活氣に富める事業家であつた。或人が上人を評して佛敎界に於けるルーズベルトと云つたが、少しさう云ふ處があつた。何となく豪傑の氣風を有して居られた。又日蓮宗の六派を統一しようとして經營されたやうな點を考へて見ると大分政略家のやうにも思はれた。兎に角上人は佛敎界に於ける近來の偉傑であつた。

自分が初めて上人と知り合ひになつたのは何年頃であつたか能く覺えないけれども、少くも二十年間位は交際したやうにある。或はそれ以上であつたかも知れない。「大藏經要義」の首にも自分は上人の依頼によつて序文を書き、又上人の懇請によつて屢淺草の統一閣に往いて日蓮主義に關する講演をしたのである。さうして上人は又自分の設立した東亞協會の會員となつて居られた。さう云ふやうな譯で自分の

火を吐くの熱烈なるものを見ると共に、他面に於ては温順玉の如く、慈念能く友と交り人と接したる高祖上人の餘韻を今に傳ふる大僧の信念の發露を思はしむる。

明治大正への佛敎家中、大僧正の如く知を朝野の名士に有したるは少く、大僧正ほど時事に奔走したる人は少い。若し其れ忙裏閑あり、静かに經を讀み、筆を執つて後進を資益したる『大藏經要義』の如きに至ては、萬世に傳ふべきの好著として推さざるを得ない。

予大僧正を知ること四十年、時に筆を執つて相爭ふたることあり、時に壇に立つて共に時事を語りたることあるも寛に、予の疎懶を捨てず、後事多く手を携へて同志と共に思想國難の打開に動く、嗚呼、偉容、尙ほ眼にあり、而して其の人なく、思想戰線一驍將を失ふの感を抱くものは決して予一人ではあるまい。

は上人に對してなかく淺からざる知遇を辱うし居つた次第である。然るに今回圖らずも幽明相隔つるに至つたことは實に痛嘆の至りである。茲に所感を述べて是れを哀悼の辭にしようと思ふ。

昭和六年五月八日

本多日生大僧正を想ふ

加藤 咄 堂

信仰は人格を表現す。吾等は腦裏に描く高僧日蓮上人の風格に最も酷似して居つたのが故本多日生大僧正である。

堂々たる體格、清秀なる明眸、眉宇に鞏固なる意志を表したる大僧正の風貌を一見して誰か之れを天台の、眞言の、禪の、乃至、眞宗の僧侶と見ることが出来よう。一見、高祖日蓮上人を聯想し得る大僧正の風格は又直に時事に感慨し、國事に憂慮し宗教家としては珍らしき國士の面目を示し、破邪の舌端、

思ひ出の何やかや

境野 黄 洋

佛敎界も、明治以後段々人が代つた。私どもの若かつた時代には、先輩としては島地默雷だの、原坦山だの、大内青巒だのといふ人々の時代で、私ども書生時代から、こんな先輩には見知り合ひであつた。此等の人々に比較をすると、井上圓了先生などは、遂に後輩であつたし、村上專精先生などは、年では井上先生の上であつたにも拘はらず、出身としては寧ろ後であり、前田惠雲さんが世に出たのは、まだ其の後であつたと言はなければならぬ。福田行藏上人や、新井日薩上人などの時代のことは、直接には私は知らない。此の人々は、私どもの知つてゐる時よりも、一と時代前になる。

日薩上人のことは、傳聞はして居るが、其の後に

於て、日蓮宗關係の人々では、私は直接知つてといふほどの人は少い。書生時代には、古谷日新といふ人があつて、よくそちで演説などをされたのを覚えて居るが、此の人は本成寺系統の人とあとで知つた。これとて直接にお目にかゝつたことはない、別に嶮然頭角を抜くといふほどの人でもなかつたと思ふ。

私は一時日蓮宗大學の講師を依頼されたことがあつた關係から、此の方面の人には、ほんの一面識の人も少くはない。本間海解さん、杉田日布さんなどは、同大學の學長であつたことがあるから、自然顔は知つて居る。杉田さんは、ほんの僅かの間であつたから、面識と言つても、知り合ふ程度は薄かつた。杉田さん學長時に、清水梁山さんがこの教授になり、頻りに私を杉田さんに紹介してくれて、三人で話し合ふ機會を造つたりもしてくれたことがある。本間さんは好い人だつた、學者らしい人だつた。そ

違ふだけ私は後進であるが、然し顔を見知り合つて以上の知り合ひではある。

今日となつて見ると、こんな人々の中で、残つて居る人は少いといふことになつた。田中智學さんも、古くから知つて居るが、餘り親しく往來したことはない。今では残つて居る大先輩となつてしまひ、其の門下の山川智應君などが、日蓮學界の權威となつた。田中さんに次いで、僅に清水龍山君が氣を吐いて居る、さうしてこれからと思つて居た大事な本多日生君が、思ひもかけず早く亡くなられた、何といふ痛ましいことかと、残念でたまらない。

本多君は、顯本法華宗にありては、長い間の管長であり、井村日成君が代つてからも、前管長として重望を負ひ、一宗の最高位の大僧正であつた。然し私に取つては、やはり親しい本多日生君であつた。君は私の同窓の先輩である。井上圓了先生が哲學館

の後の學長として、風間隨學さんにも、長い知り合ひにはなつて居る。

それから清水龍山君の時代になるのだが、清水君は、さんとも上人とも言はず、やはり君と言はねばならぬほど親しい關係になつて居る。今の學長望月日謙君も、先づ舊い知り合ひである。

學校關係でない方では、前の加藤文雅君とは、甚だ親しいといふのではないが、一通りの友人であつた。加藤君は「日宗新報」を書いて居られたから、私も雜誌記者をして居た關係上、度々遇ふ機會があつた爲めの知り合ひであつたかと思ふ。森本文靜さんは、話したことはない、顔は見知つて居る、然し臨田堯淳さんなどは、餘程よく知つて居つた。けれども同じ此の仲間の人でも、清水梁山君ほど親しくした人はない。清水君とは、先づ親友といふ程度の中で、君もさんでも上人でも先生でもない、矢張りクンの部類である。今の管長酒井日慎さんも、年が

を創立せられた時に、君は眞つさきに這入つて來た人で、第一期の出身であり、私は第三期の出身である。私は學校では君に遇ひ、交際するほどのものはなかつたが、然し其の頃でも君の名は聞知して居た。私の先輩の學生たちが、本多日生が、能く學生仲間、やかましく議論をするといふことを聞いて居た。君は當時二十四五の血氣盛りの時であつたから、他宗他派の學生の中に雜つて、此等の人々と議論を聞はして居た。談論風發のさまが、今からも思ひやられる。

君の容貌は堂々として居た、姿態は頑強に見えた、音吐は朗々として、雄辯家の要素に缺けるところはなかつた、折伏の舌鋒は鋭かつた、然し君が此の日蓮魂を堅く保持しながらも、其の學風は、どこまでも哲學館式であつたところに、私達の首肯し得られる態度があつた。哲學館式といふのは、どんな式かと疑ふ人があるだらう、それは文字の末に拘泥し

ないで、書物を讀んで讀むことである。一冊の書物を通覽しても、文字言句は二の次ぎとして、其の本の根本をつかまへ、之を土臺として、自由自在に末節の議論を演釋して行く、文字に捉へられずして、文字を驅使して行くところに哲學館式學風がある。君はどこまでも文字の訓話學者ではなくして、讀見の學者であつた。君の書いたものは『本尊論』を始め、何を見ても、此の點がはつきりと現はれて居る。それに偏狹な宗學の語句に拘束せられないで、普通の哲學的の考へ方や言葉を、巧みに使つて行くところにも、確に一般の日蓮學者とは違ふ特色が見られた。

勿論君は一片の學者ではない、著述も可なり多くあるが、然し自らも學者を以て任じて居たものではない。君は日蓮上人の如く、法華最第一の眞實義の宣傳者として、あらゆる手段を工夫し、方法を考案して、努力に一生を終始した宗教家であつた。

然し其の傳道の背景を成すに十分な、佛教及び日蓮宗學の智識を持ち、間接には相當の哲學的智識を持つて居られた、そこは單なる演說家の類ひではないことは言ふに及ばないことである。

遠慮をするな、どんなことでも、正しい手段である限り、此の道のために進出の方法を考慮しやうではないか。これが君の事業の精神であつたらしい。日蓮各派統一運動もやつた、天晴會も組織した、あとから新方法を考へた。私は君が役人などにやたらに近いて、宗教局あたりへ頻りに出入するのを快しとせず、イヤに官僚的だと思つて、一寸此の事を言つたことがある。さうすると君は、何でもよいではないか、悪い事をしない限り、佛教を押し弘めればよいではないかと言はれたことを記憶して居る。其の時成程それも一方法だなと思ひ、君の立場ややり方がわかつた様な氣がしたことがある。

天晴會の盛んにやり始められた頃には、私も能くやう。然し小さな顯本法華宗が、大きな日蓮宗を代表するものと考へられる様になつたことは、何と言つても本多君の偉大な活動のお蔭である。失禮の言ひ分かも知れないが、本多君にして斯くまで顯本派を大きくし得た此の教團を、此のまゝ、背負つて行く顯本の諸君には、可なり荷の重い大任である。恐らく背負つて見てから、成程自分達には重い荷であるといふことを痛感した時、本多君の力といふものに對し、眞の感謝の念が起り、眞の偉大さを理解を生ずる時が来るのではあるまいか。

君に遇ふ機會も多かつた。統一運動の時にも引つ張り出されてお手傳をしたこともあつた。思國會になつてからは、兎角御無沙汰勝に打過ぎて居たが、去年の連續講演の時には、私も御依頼により、御注文に應じて、久しぶりの統一閣に出席し、聖徳太子の話をした。此の時君に遇つて、何だか何年振りかでお顔を見た様な氣がして、何だかなつかしい感じがした。君は近來病氣だと聞いて居たが様子も元氣も大して變りがないナと思ふて、安心して歸つたのである。突然君が亡くなられたことを知つて驚いたのである。私に取つては、眞にこれは突然であつた。君にはまだ一殘された事業がある。君は今死ぬべきではなかつた、然し死んだのである、致し方がない、君の死を悼むものは、君の教團の人よりは、恐らく教團外の人だらう、少くとも私は其の一人であることを疑はない。

是れからさき、若い人達によつて教團は支持され

廣く日蓮宗を見渡したところでも、種々の意味に於て、清水梁山君と清水龍山君、本多日生君と田中智學さんとは、明治以後に残された日蓮の四人男である。此の中年長の田中さんがまだしやん／＼で働いて居らるゝことは、何よりの喜びではあるが、梁山君は此の中で割合に早く死んだ、續いて一番あとに残りさうな本多君が死んだとは、ほんに世の中は

分らないものである。四人男の中で、今は田中さんと龍山君だけ残つた。此の二人はまだ一勢がい、それにしても本多君の死は、何と言つても思ひ切れないほど惜いことをした。

本多日生師を想ふ

今泉定助

本多日生師は私と共に永く中央教化團體聯合會の理事として非常に熱心に盡力せられた方であり、時々會合も致し亦屢々會話の機會もありましたので、師の高潔なる人格と卓越せる識見とは克く存じて居りまするが故に、師の御他界は殊に愁傷の至りに堪へないのみならず、全く我が思想界の爲に衷心より惜むものであります。抑々師が三十餘年間の教化生活に於ける數多の偉績は、殊更に私共が喋々するまでもなく、諸子の夙

は誠に愉快であります。のみならず既成宗教界の空氣も何となく沈滞せる時機に際して全く祖師の再來の如く、一生を通じて不撓不屈、一意専心、我が宗教界の爲に獅子吼し了されたことは眞に敬服の外ありませぬ。

尙私共の知らない點に付きましても種々表彰致すべきことは多々あることであります。それは他にお譲りすることに致しまして、私は衷心より師の高徳を稱へまして、哀悼の誠意を披瀝致ししますると同時に、師の冥福を禱る次第であります。

(文責在記者)

本多日生上人の遷化を悼みて

大迫 尙道

上人の我々人類に對し垂れ給し教化の功の偉大なりしことを感謝し、其遷化の凶報に接して哀悼惜別の情に堪へざるものあり、然れども今更何程惜みて

に知悉せらるゝ所でありまするが、師は常に祖師日蓮大士の生命となされし立正安國の精神を堅き信念とせられ、而して宗教界の腐敗墮落に伴ふ顯本法華宗の廢頽せるを嘆じて救済の任に當られし當時もナカ／＼言ふに言へぬ苦心をせられ、宗徒からは異安心視されし程の同宗の本尊問題も遂に完全に解決せられしことは承知して居りまするが嘗ては鎌倉龍口寺に於て田中智學師等と宗門に關する講習會を開きて新界の啓蒙に昂められしこともあり、爾來各所に講筵を開かれましたが孰れも多大の感動と深き印象を與へられたのであります、殊に教化團體の爲には理事として専ら社會教化の方面に盡力されたことは多大であります、而してその所論に於ても大乘の見地に立脚せられてあつたが故に、所謂狹義の俗佛教の如く、或は宗教神道と衝突したり、又は他の宗派と反目すると云ふやうなことがなく、極めて廣く、私共神道家としても大に共鳴する所が多くあつたの

日生上人の特長

小笠原長生

一、立正大師號に就て

本多猊下の御遷化になつたのはいかにも残念なことであります。私が日生上人に就て一番に感じて居ることは、一言にして申せば不情身命であつた點であります。日生上人の日常の御行動を見ても亦澤山のお手紙にも、不情身命の御精神が明瞭に活躍して居ります、これ等は捨身でなければ出来ないことではありません。

日生上人は色々よい仕事を澤山に成されたが、その中で最も鮮かなのは立正大師號の奏請であると思ひます。立正大師宣下は恰度大正元年が二年の頃で

あつたか、本多親下と佐藤中將と三人集つた時に其の話が出ました。日蓮聖人に對して大師號宣下を奏請しようと思ふが」との相談をうけたのでありましたけれども、「今は時機でないと思ひますが」と話しました。佐藤さんも同感でありそれは其儘となつて居たのです。其後私共は忘れたやうでありましたが、本が多親下は今こそ時機はどうかとおたづねに全然賛同致しました時に、然らばといふので東郷元帥を筆頭にしようといふので御足勞になりました。元帥は日蓮聖人に大師號、それは當り前の事でしょう、苟も國家の觀念あるものは判り切つたことでありますと賛成はされたが、署名の點に就て是非私に努力するやうにとの事で其後本多親下から左のお手紙を頂きまへした。

拜啓 貴翰拜誦元帥への御内諾は何分とも宜敷御高配に預り度候 各派管長は何れも同意に付願書

淨寫捺印可仕本月中には大鉢まどまり可申敷 崇敬者側に就ても犬養 床次 大迫 矢野 佐藤 貴下 山田 木内の諸氏は賛同の意明かに候 加藤 三上の兩氏へは近日交渉の所存に有之多分御同意被下候事かと存居候 井口氏へは發信交渉中に候

又願書文案上野季三郎氏と宗教局とへ内儀候處御同意を得申候

内奏の尊號は「立正大師」と決し申候 他は更に可申上候 敬具

大正十一年八月廿六日

小笠原子爵閣下

本多日生

ありまへす。

拜啓 元帥閣下御承諾被成下候趣御電報に接し千萬難有奉感謝候 各派管長の調印は九月一日に了り派遣員二日に歸京可仕と豫想仕候間三日頃電話にて貴下の御都合御伺候上貴邸へ本願書持參爲致可申候間何卒宜敷御高配被成下度候 敬具

八月廿九日

小笠原中將殿閣下

本多日生

本多親下は夫等に就ては非常に御奮闘をされて居ました。要するに親下のあの精力の絶倫であつたのと、それは捨身にならねばやれない大きな浄業で僅々二三ヶ月以内であの立正大師號の御宣下を賜つた事はかくれたる本多親下の大きな精進でありました。本多親下が御立派な躰格であつたにも不拘 早く逝かれたのは全く從來からの重なつた御無理からではないでしようか、あまりに心身の酷使からではないかと思ひます。立正大師の六百五十遠忌に際し

て、本多上人を喪ふたことは一入意義の深いものと感じます。

二、統合問題に就て

大正三年秋に本多親下が來訪された時、日蓮宗の統合問題に及びました。これには私には私がかねて日蓮宗の統合を必要と思つて、夫には先づ身延系と顯本派を結ばすに限ると考へまして、日蓮宗の佐野宗務總監と懇意にして居りましたから、どうしても此の二人に握手して頂きたいと計畫致しましたが、幸に双方が御快諾されたので、其時に記念として一對の香爐を一箇宛お贈り致しました。其後この問題に就ても本多親下は非常な努力をお渴しになりました。

三、講妙會のはじまり

本多親下の創設された幾多の會があつて、殆んど寧日ない有様に御健闘なさつて居ました、其の中の一つである講妙會の起りを述べませう。古い話であります、ある時旅順の閉塞隊に出た勇士であつた齋

藤七郎 正木義太 吉田孟子の三人が見へられて天晴會でも色々有益な話を聞くけれども、更に佛教の講義がして頂きたい、就ては本多親下に私から話して貰ひたいとのことでありましたから、そこで三人と共に品川へ參つて其の話を致しますと、本多親下はそれは面白い早速やりませうと申されて、淺草の今統一閣のある所のお寺、其頃當林寺と稱へて居た其處で毎土曜日致さう、就ては會名を何としませうかとの御相談でしたから、講妙會は如何でしようと申して、それは結構となつた譯であります。この講妙會の一番最初の御講演が法華經如來壽量品でありました、其時私は自我偈の速記をして見て頂いて、これで宜しいと允可を得たのでした。其後講妙會では法華經から御遺文と一通りの講義が済んで、次に大藏經の講義となりかの大部の大藏經要義が出版されるに到りました。其頃の事を考へますと本多親下の精力の絶倫な事、正法の愛護に就て不惜身命の態

度が目前にチラツキます。近頃私は忙しので緩々お目にもかゝりませんでした、一昨年暮に何年振りかて水交社でお遇ひ致しましたのが最後でありました。

昔は私共よく蓮の旗を立て、やつたものですが、今は立派なお若い人も少なくないので、私共は引退致して居りますが、あのお方はどうか其蓮の旗を押し立て、充分法國のために御健闘して頂きたものであります。(文責在記者)

本多上人を慕ふ

佐藤 阜藏

私が本多上人の知遇を辱うしたことは比較的近年のことに屬し素より上人の全豹に就き承知して居る譯ではないが私の見る所では世間には佛教の造詣に深い人もあろう信仰の厚い人もあろうが其造詣と

信仰とを擧げて之を人の心中に推移するの熱と力とを有すること本多上人の如き人は果して他にあるであらうか此點に於て私は特に上人に心服する一人である

上人は少壯にして我國佛教界の墮落を歎き獅子奮迅の勇氣を以て其の廓清に當られ其の颯爽たる勇氣は斯界を風靡する概あり群類を震撼せしめしが勿論此の如き大事業は一代にして全部を成し遂げ得る筈もない即ち上人御自身としては所期の目的の一半をも達せずと考へられしならん然れども其奮闘によりて佛教界覺醒の氣運を促されたる功績に至つては永く没却すべからざる事實と云はなければならぬ

上人は夙に東洋思想の不統一なるを慨し統一團を組織し更に知恩思國會を起す等大に其統一に努力せられ又東奔西走教化に盡瘁せられ虚暖かなる暇もなき概ありし之が爲教を傳へ貪夫して廉に儒夫をして起たしめしもの其數枚擧に暇あらず斯道に貢獻され

し功績の多大なりしは顯著なるも思想の統一方面に至りては未だ目的の半をも達するに至らず一旦病を獲て渣焉として遷化せらるる惜みても尙餘りありと云はなければならぬ

然れども歸つて考れば釋迦牟尼佛にしても日蓮聖人にしても其生前に於て成し遂げたことは其目的の一小部分に過ぎない其大半は皆後繼者に依て遂行せられたもの否尙遂行せられつゝあるものである本多上人の理想は一代の間に其全部を成し遂ぐるには餘りに高遠である其成功は當然後繼者の手に遺されたものと見なければならぬ 幸に後繼者には僧俗を通じて幾多有爲の人々があることなれば必ずや之等の人々に依りて顯著なる事業は成し遂げらるゝことであらうしかしながら今日の世相は實に複雑にして容易ならざるものがあるのである此間に處して斯界の統一廓清を行ひ教化の實を擧ぐるは並大抵の努力では出來ることでない之を考へたならば後繼者の責任

實に重且つ大なりと云はなければならぬ希くば協心
戮力と衷共同勇往邁進充分の効果を擧げ上人の遺靈
をして地下に満悦せしむる様努力せられんことを切
望して止まないものである。

本多日生上人を悼む

下村 壽一

去る三月の半ば頃新聞紙上で、本多上人遷化の報
道を見て非常に喫驚した。御病氣の事も知らずに居
たから、何時も元氣の旺盛せる健康其のもの、如き
上人が、遽かに他界せられたとは如何にしても信じ
られぬ位であつた。其の後、臨終の御様子などが詳
しく中外日報に登載されて居たのを見、當代稀なる
傑僧を失つたことを泌々痛感して、今更の如く哀悼
の念に堪へぬものがあつた。
自分が故上人に御目に懸つたのは、大正六七年の

頃、前沖繩縣知事大味久五郎氏の邸で、同氏母堂追
善の法蓮に連り、上人の法話を聴聞したのが初まり
であつた。爾來公私の會合で、屢々熱烈で談博で而
も潤いのある教化上の御意見を拜聴して、教へらる
所が頗多かつた。或る時は會々同じ列車に乗り
合せ、風教の事を談じ合つて、夜の更け行くを知ら
なかつたこともあつた。上人は多くの宗教家に見る
やうな、自己の宗門の事のみを離脱されることな
く、何時も國家の風教國民の思想に關する問題を、
大乘佛教の見地から達觀して論議されるのが常であ
つた。自分は、上人の宗教家としての眞面目は、其
處に存して居つたと考へる。思ふに上人の徳望と學
識と筆舌の力とに依つて、直接間接に薰化を受けた
緇素の數は幾千萬の多きの上ることであらう。上人
はそれだけ大きな精神的存在であつた。左れば、上
人の遷化は、顯本法華宗の損害ばかりでなく、我國
全宗教界の爲、將又、我國民の精神生活に取つて容

易ならぬ損失であつて、眞に惜しみても猶餘りある
恨事であると謂はなければならぬ。自分は、此の大
損害を補填する途は、上人の薰陶を受けた方々が、
各自の裡に上人を生かざるゝこと、換言すれば、克
く上人の遺志を繼承し上人の先蹤に倣つて、教國の
爲めに奮闘さるゝことを措いて外に有るまいと思
ふ。上人ありし日の偉大なりし偉を思ひつゝ、悼
詞に代へて感想の一端を述べた次第である。

本多大僧正の遷化を悼みて

井上 一次

予は本春以來、暫く本多大僧正にお目に懸らな
つたが、遷化の報が予の机上に投せられたときは、
唯只茫然自失、僅かに密葬に参列して、多年予に與
へられた御厚誼に對し、感謝と共に哀悼の意を捧げ
た。

回顧すると、予が初めて大僧正を知つたのは、日
露戰爭直後、天晴會に入會した時からである。予が
この會に入つたのは、立正大師の教義を究むるより
は、大師の人格殊に奮闘的精神に觸れて、軍人とし
て必要なる性格を養ふ爲めであつた。當時天晴會の
首腦の地位に就いて居られた大僧正は、獨り教義の
みならず、大師の人格に關し、微に入り細に就き説
示せられ、予に修養の素地を與へられたことは、實
に多大であつた。その後二十有餘年に亘る予の陸軍
生活に於て、聊か皇國に報ゆることが出来たのみな
らず、退職後に於ても、各種方面に活躍する意氣が、
益熾んなるものあるを覺ゆるのも、必竟往年修養の
素地を與へられた結果であつて、大僧正に對し常に
感謝して居る次第である。
日露戰爭以後幾何ならずして、予は屢々海外に赴
き、大僧正の温容に接するの機會を得ることが少く
なつた。併かし苟くも機會があれば、大僧正の御指

導を受くるに努め、大正十一年廣島に在勤したとき該地方の風尚が、安藝門徒の稱ある如く、淨土真宗の感化を受くること多く、進取的氣象に於て、動もすれば欠けるところがあることを觀取し、同志の士と共に日蓮主義を鼓吹するを謀り、先づ日蓮宗の各派を聯ねて立正會を組織し、大僧正の來臨を請ふて發會式を擧げた。その後も大僧正と連絡を保持して主義の普及に努めたが、この會が一時該地方を風靡し得たのは、全く大僧正の賜であつた。

予の廣島在任は、遺憾ながら一年内外に過ぎず、再び北樺太占領軍の職務に従事し、その後は仙臺に赴き、大僧正と離るゝの已むを得ざるものがあつたが、昭和二年軍職を去つて以來は、大僧正と觸接し、驥尾に附して社會的活動をなすを得るに至つた。時恰も我が國は、各種の方面に於て困難に陥つて居つたが、大僧正は身を挺してこれが打解の任に當り、街頭にまで進出して奮闘せられた。豪壯なるその意

その遺業を究め、その遺書を讀むものは、その卓見と偉績とを窺ふことを得、尊崇の念の禁する能はざるものがあるであらうと思ふ。若し大僧正に假すに、尙幾星霜も以てしたならば、更に輝々たる偉績を擧げられたであらうが、誠に惜しいことである。

本多日生上人の遷化を承りて

四王天延孝

私が上人に初めて御目に懸つたのは大正の初め、旭川市に畢生會と云ふ日蓮主義の團體が生れたとき、其の會の世話人の末席を汚したときであつた。爾來外國を駆け廻つて居つて御英委に接することが少なかつたが、岡山、姫路の御同志能仁、中川兩師等が海外に出られるとき間接に御消息を承り、相變らず法國の爲に御盡力下さることを承知し感激に堪えなかつた次第であるが去る大正十二年東京で自慶

氣は、往年鎌倉に於ける大師の活動も亦斯くあつたかと想はしめた。本年は大師遠逝以來實に六百五十年、追憶の念は國內に漲り國民の血を湧かして居るが、大僧正がその遠忌を營むに先ち、流焉として遷化せられたことは、殊に痛恨の極みである。

大僧正本年の抱負は、各宗を統一して佛教の心髓を宣布するにあつたらしく、これが爲め、先づ日蓮宗各派の統一を企圖せられたらしい。天晴會當時にあつては、少くその目的の一部を達成して居られたやうであつた。然るに天晴會も、その後何時となくその形を失ひ、日蓮宗の各派の統一も、その目的を達するに至らなかつたやうである。併かし晩年に於ける大僧正の活動は、常に超宗派的のものであつた。又その著書なども、一宗一派に極限せらるゝことなく、廣汎的のものであつて、その立論公正著眼犀利、全然群を抜いて居つた。故に大僧正本來の抱負は、實現するに至らなかつたやうであるけれども、後世

會々合の節數時間小生の講演を御聞き下され御共鳴下さつたが近年は知法思國の會合にも統一閣の講演にも度々卑見を述べべる機會を與へられ誠に感謝措く能はなかつた所でありませう。上人の御説きなされた立正大師の教へによつて私共が啓發せられ信念を深めたことは、申すも愚かなことではありますが、私共が最も強き感化を與へられたことは、其の實際の御活動であります。之は一々例を引いて申す迄もなく東奔西走席暖かなるに暇あらず、殊に近來は立正大師の跡を踏みて辻説法をなされることは、如何に御元氣で自信があつたとは申せ、不惜生命の大覺悟をお持ちにならなければ出来ない所であります。此の覺悟をなされるには今日の時勢の容易ならざること善く御洞察になつたからであり、身を以て困難打開に當らなければいかんどの勇猛心からであると考察致します。又それが吾々にまで大衝動を御與へ下さつた大きな功徳はあつたが、事實御健康を害

し、御遷化を早めたことは吾々後輩として誠に痛悼に堪えない所でありませう。上人の御遷化は一宗一派の損失ではなくて實に帝國の大損失であると信じます。殊に自界叛逆難と他國侵逼難とが錯雜して押し寄せ來りつゝある國家の現狀に於て之を痛感するの

でありませう。吾々は一方に於ては、偉大なる上人の御心霊が縱令幽冥界を異にするとも何處迄も法國守護の爲めに御盡し下さることを確信しますが、此の世に残された御同志の諸賢は上人が此世で背負つて居られる大きな柱の重荷をめぐりの上に分けて頑張り通し、此の國難を美事に切り抜け、大和民族が世界に對し法界に對して久遠の昔から負つて居る大使命を果すことに御盡瘁下さることを祈ります。之が何物よりも最も大なる上人への供養であると確信します。私共も及ばずながら驥尾に附し奮闘致す積りであります。上人の御遷化は實に青天の霹靂の如く吾等の心魂を打ちました、今や其衝動が去つて

冷靜に善後の謀を考ふべき時と存じ一言卑見を述べさせて頂きました。(了)

恩師紀念

岩野直英

私は明治四十五年三月、母に逝かれてから、佛敎を學ぶの必要を感じた、幸に大正二年の春、佐藤鐵太郎君の紹介に依り、日生上人に値ひ上り、その敎を受けることに成つた、爾來十九年である、常に義趣を問ひ、經驗を聞き、亦屢々實行問題を授かつたが、近頃漸やく人の道に就ての根抵意識が明確になつて來た、他人様と比較をするのではない、昔日の私と今日の私と比較して、著しく進歩せることを自覺するのである、是は實に私一生の大善利益である、今後、事毎にそれを悦ぶとき、上人を思はずには居られまい、我が身中に恩師の紀念塔を建てて、

先入を主として憚らず行きたいと思ふ。

精進供養怠るまじい積りである、勿論、私は新たに師を撰び、進んで學問するのであるが、その場合、

本多大僧正を憶ふ

(四月五日於統一閣 聖應院日生上人三七日忌追悼講演)

海軍中將 佐藤鐵太郎

只今野澤閣下から、本多上人が御在世中執られた御態度を其の儘御示しになられました、私非常に意義深く拜聴致しました。私にもこの追悼會に於て何か所感を述べるやうにといふことでありますので、本多上人と私の關係で痛切に感じましたこと、それから、私本多上人に對して腹の中でお詫をしなければならぬ事があります。其の事を極く簡単に申上げて見たいと思ひます。

員になつてからであります。天晴會の會員になつたのは明治四十二年頃であつたかと思ひますが、どういふ譯で入つたか判らない内に、私は天晴會の會員になつてしまつて居つた。いづれ私の友人が天晴會の會員となつて居つて、私を紹介して會員名簿の中に入れて置いて下さつたのでせうが、それは私がしたのだと言つて各乗つた人は一人も無い。どういふ譯で、私は天晴會の會員になつたか存じませぬが、兎に角天晴會の中心は本多現下で在らせられる

から、本多親下にお眼に掛りたいと思ひまして、品川の妙國寺に伺ひましたのが、本多親下に始めてお眼に掛つた次第でありました。其の時本多上人が色々御話下さつた内に、「あなたは日蓮聖人の教に就ては何事も御承知ないのか」「ハイ、私何も承知致しませぬ、たゞ私は日蓮聖人は偉い方だと思ひまして、其のお遺しになつた教を受けたいといふ心持であります、本多上人は此の事に就ては大家だといふことでありますし、私何だか能く判りませぬが天晴會に入つて居るさうでありますから、旁々教を受けに参りました」それならあなたは日蓮聖人をたゞ偉い人だと思つて居るのみですか」「さう思つて居る切りではありません、まだ何も判りませぬ」それなら法華經は御存知でありませぬか」「法華經なら私戦に出て居ます頃から常に頭腦に響くことが澤山ありますので、時々読んで居りましたけれども、日蓮聖人といふお方にはまだ些つとも觸れた事がありませぬ。た

ゞ高山樗牛を介して、あれは私の同郷の友達でありまして、あれが日蓮聖人に歸依して居ります爲に、偉い人だといふことを聞いたわけでありまして、何も知らないのではありません」さうですか、それなら後來の爲に一言申上で置く、あなたは日蓮聖人は偉いと言つて讃めるが、偉いといふことのみならば世の中に外にあるかも知れませぬ、併し私は初めに日蓮聖人は慕はしいお方だといふことを頭に入れてお置きにならぬと思ふ……」洵にこれは意外であつた。私孔子様は偉い方だとは思つたけれども、慕はしい方だといふ考が起きたことはない、それを日蓮聖人は慕はしいお方だといふことを考へて貰ひたいと言はれたのであります。其の頃本多上人はさういふ情味のあるやうな方のやうに見えなかつた。何でも四箇の格言を以て起つた頃は火のやうになつて、潑刺たる勢ひを以てやつて居られました。この言葉を聽いてそれとなく深く頭腦に感じまし

た。その後二三年経ちましてから千葉縣に講演に参りました時に、或る坊さんが私に字を書いて呉れと言ふ、見ると「因其心戀慕 乃出爲說法」とある、はゝア、此點を仰しやつたのだ、今迄日蓮聖人に對しては、御遺文などを見ても洵に理論が透徹した、何とも突込みよ様の無いやうに立派にお説きになつたお方だといふことは知つて居りましたけれども、成程これでは駄目である、日蓮聖人が自分の頭腦から離れないやうになるには、日蓮聖人をお慕ひ申さなければならぬといふ事が始めてわかりました。本多上人から受けました教の中に於て、一番初めに教へられた感銘の深い事はこれでありました。それからだん／＼お親しくなりましてから、私は斯ういふ事を承りました。それは本多上人があの通り偉大なお方に成られたのは、お師匠様が偉かつたからだといふ事を熱々感じました。今も野澤閣下から、本多上人の御幼少の時分にお偉かつた事をお

述べになりましたが、何でも十八九歳の頃に一箇寺の住職に成られた、そこで皆が、名譽此の上もない事であると言つて大いに喜んだ。ところがお師匠様の見玉上人といふ方は、其の事を聞かれて本多上人を破門されてしまつた、

「汝聖應こそ稀に出た天下の才物である自分は大に期待し將來も囑望して居た、然るに今早や寺院生活に決したのは小成に安んずるもの歟、一山の住職としては思ふ様に暇は得られない、従つて勉強は出来まい、此年代に十分命がけで學問をしておかねば將來世間に出て立派な人天の大導師にはなれまい、いくら本山の勤めでも寺を持つといふことは法國の爲め甚だ残念である、妙満寺の管長位になるには何も汝を煩すには及ばぬ、汝の任務はもつと重大であるが、遂に易きに就いた事は面白くない、多くの人は祝詞を述べるであらうが、自分としては汝

を勸當する、これ我心からの餞別である、嗚呼爲すあるの才物も爲すなきに終るか、これ程の遺憾はない、寔に惜しい事である、何としても自分は不満に思ふ、實に不目出度い事である、汝は今我が言に何も感じまい、念頭にも留めまいが、どうか我が最後の一言に心を留めよ、其の得度式の初一念を忘れず奮起せよ、さらばぞ」斯ういふ意味の御手紙を頂戴したさうであります。其の時に本多上人は、私は決してそんな考、ちやない、お師匠様がお間違ひで在らせられると言つて師匠に對して反抗することは宜しくない、自分さへ確乎とした考を有つて護法の爲に一身を捧げれば宜いといふので、お師匠様から破門された儘にしてズツト長い間やつて來たが實に辛かつたといふお話であります。

それからだん／＼經過する中に、本多上人は激烈たる勢ひを以て雜亂勸請の折伏を試みる等のことがあつたので、それが因になつて到頭僧籍を剝奪されるといふことになつた。そこで更に獨立の布教團體をお造りになつたといふやうな事もありますが、其の後宗門に復られ、宗門の中で押しも押されぬ立派な地位にお成りになつた、今で言へば宗務總監ぐらゐの地位でせうが、兎に角樞要の地位に就かれた。すると其の頃お師匠様が御病氣であつたので宗門を代表してお見舞にお出になつた、宗門の代表でなければ破門された身として御逢になる譯にはゆかぬ、さうして此機會に於て兒玉上人にどうか破門を許して戴きたいといふことをお願いしたさうであります。「私の衣鉢はお前に傳へてやる、併しながらどうしてもお前に傳へることが出来ない教が一つある、是だけは今日お前に傳へる譯に行かぬ、最後の教は時を待て」と言はれて破門を許して下さらぬので本多上人は實に恐入つてその儘歸られた。暫く經つて又御病氣で御見舞に行かれた、すると兒玉上人

せんかといふ憂があるといふことを承つて居りました狭心症といふ病氣は非常に苦しいものださうであります。如何に偉い人でも狭心症の發作に遭ふと轉輾反側するさうであります。狛下が若し狭心症にでもおなりになつたら、如何にお偉い狛下でもお苦しみになるだらう、すると法敵がそれを捉へて「なんだ、如何に本多が威張つたつて、あの死に態は……」と言ふだらう。どうか他の御病氣であつて戴きたいと念じました。所が歸つて他の御病氣で如何にも結構な大往生であつたといふことを承りまして安心した次第であります。實に本多狛下が何とも申し様の無いほど偉大で在せられたのは、やはり是はお師匠様の御薫陶の賜であると思ひます、僅か十八九歳の時に一箇寺の住職になつたと言つて皆が喜んでと言つて破門された事、又最後の教は俺の死ぬ時だとやつて教へられた事、さういふ偉いお師匠様が居られたからこそ、あゝいふ立派なお方に成られた

のではないが、本多上人御自身もキツト左様に考へて居られたと思ひます。

それから本多上人は私に對して——皆様も御同様でありませぬけれども——頭腦に響く教を澤山教へて戴きました、私が一番感しました事は、本多現下はど人の心を善く判断し、而して而も仔細に觀察して、さうして御自分の態度をおきめになつた方は無いと思ひます。それは偶には本多現下と雖も人を悪く言はれることがありますが、併しそれは其の人をスツカリ研究された結果悪いといふことを言はれて居られるので、それは其の方が宜しいのであります。併し無暗に人の事を彼此れ言はれるといふ方ではない。私は此の統一閣で本多上人の御講義を承つて居る時には、いつでも現下の講義して居られる右側の最近位地に坐つて居りました。それは吉田先生も能く御承知であります。所が悪い事にはいつでも現下の御講義を拜聴しながら坐睡をしてしまふ、悪い

事とは能く知つて居りますけれどもいつとなく眠つてしまふ。それで吉田先輩から或る時忠告を受けました、「佐藤さん、あなたは現下の講義を聴きながらいつでも坐睡をなさる、まあ、これが遠い所ならば宜いけれども、顔の前で坐睡をするとはひどいやありませぬか」と本多上人の居られる所で笑ひながら御忠告下さつた、私一言もなかつた「恐入りました」。其の時本多上人より非常に良い訓戒をして戴きましたと共に面目を施しました。現下が言はれるには「いや、さう考へないでも宜い、若し佐藤さんが眠り通すなら私は允可を與へるが未だ中々さうは行かぬ、時々眼を開けて本を見る、初めは癪に觸つた、不都合なことである、俺が講義して居る前で坐睡をして居るとは怪しからん……所が時々眼を開けては本を見て居る、それから一體何處を講義して居る時に眼を開けるかといふことを氣を附けて居つた。さうして眼を開けた時に話して居つた事を講義が濟ん

でから質問する」と言はれたので、私は嬉しいと共に非常に感しました。尙ほ現下は「佐藤さん、あなたは能く知らぬかも知らぬけれども、初めはよい心持になつて寢て居られるが、是はどうかといふ時になると眼を開くのですネ、君は寢て居ると言ふけれども本當に寢て居るのか」と仰しやつた「本當に寢て居るのです、眠るまいと思ひながら、つい好い氣持になつて眠つてしまふのです」と申して置きましたが、それを不都合な奴とお考へにならずに御指導して下さる、さうして佐藤が坐睡をして居るのは懶けて睡つて居るのではない、氣分が良くて睡つて居るのだと解釋して下され、私が眼を開けた時の事を後で質問するといふこと迄も注意して下さるといふは實に有難い次第であります。

私は極めて武骨な者でありますから、時々無禮な事を申し上げた事がありました。其の想ひ出を一つ申し上げますと、或る時現下が「佐藤さん、君に一つ言

ふことがある、私僧侶として耻かしい事があるから、今迄の仕事を廢めて山に引込まふと思ふ」といふお言葉である、私意外に思ひまして「どうしたのですか」と伺つた所がそれをスツカリ話して下さいました。そこで私は「それでは現下は御自分の爲に生れて來たのですか、世の爲にお生れになつたのですか、私日蓮聖人の教を平生から承つて居りますか、此の事を現下は身に行はれることは出來ぬのですか、世の爲にお生れになつたのではないですか」と申し上げました。さうしたら現下は「悪かつた許して呉れ給へ」と言はれまして、それから後は何とも言へない程眞剣に活動を始められたので私も非常に喜び且安心致しました。かういふ具合に現下は御自分が悪かつたとお考へになると、モウ決してそれに執はれるやうなことなくしてスバツとそれを改められたのであります。それは場合に依つては、深く考へられて其の言ふ事に従うては宜しくない、従はな

いのが道であるといふことを御決定になつた時はいざ知らず、御自分でさうだと思はれたならば直ぐ其の場で悪かつたと仰しやつて改められました。是なども私は非常に良い教を受けたと思つて喜んで居ります。

斯様に申述べて参りますと、祝下追憶の話はいつまで経つても盡きない譯であります、要するに本多上人は失敗でした、四箇格言を以て起たれて、各宗の悪い所を正されてさうして佛教を統一しようといふお考、それは祝下は土俵ではお勝ちになりました、たけれども相撲にお負けになりました、眞言とか念佛の連中を土俵では投げつけられましたけれども、奈何せん、やはりお志を完うすることが出来ませぬでした。宗内各派の間の關係も亦それと同様、其の發端としては御成功になりましたが、遂に佛教の統一も出来なければ、日蓮各派の統合も十分に出来ずにお遷化になりました。此の事は私如何にも残念に

存する次第であります。

明治の初年新井日蓮上人が知られてから急に日蓮宗門が認めらるゝ様になつたやうに、あの偉大なる力を有つて居れる本多上人は確かに日蓮上人を世の中に紹介して下さつた事には十分に御成功になりましたが、破竹の如き勢ひを以て今日の宗門を本來の姿に返すやうに力められた御事業即ち法圓冥合の大義を闡明することに就ては、生意氣ながら本多上人を御助け申上げて参りましたけれども、遂に其の望も断られたやうに存じます、モウ本多上人を除いては其の任に當つて戴く方は世の中にもありません、是は私の遺憾に堪えざる所であります。何故私が其のやうな事を申すかと言へば、本多上人が世の爲に立たれて活動なさるといふに就ては、吾等同志の何人がが權力を得たならば、日蓮聖人が北條に依つて苦しめられたやうなことなくしてあの偉大さを現すことが出来るであらうといふことを、實は不願ながら

本多上人にお話した事がありました、それが實現を見ずにお遷化になりましたことは返す／＼も遺憾に存じます。マア是は私としてはあまりにも大きな事でありますので直接責任を感ずる譯ではありませぬが、自分の懐いて居た大きな望みが断られたことは如何にも残念でなりません。

それから本多上人が斯ういふ統一閣といふものをお建てになつたに就ては、いろ／＼な御趣意がありませうけれども、私の聞いて居ります所に依ると、是は本當の統一其物の統一閣であつて、統一閣の本來の冀望として佛教各派のみならず宗教の各團體に此統一閣を提供し國民の大教化を行ふ根本中堂としやうといふお考であつたといふことを私は信じて疑はぬのであります、何か之を顯本のみものにするとか何とかいふ黨中黨を立てるといふやうな小さなことは本多上人の志ではなかつた。それがだん／＼狭くなつて顯本のみものになり、盛泰寺の私

有になるといふやうなことは、決して本來の目的でもなく本多上人のお志でもないといふことを私は確信します。この間も實は或る所で申した事でありますが、法華經壽量品にもある如く、明治天皇様の御詔勅は勿論、大御心の現れである御製、あの是好良薬を國民一同が服んで、各々の病氣を癒せば、畏れながら、明治天皇様が堯舜として再びお現れ遊ばす、吾々が再び明治天皇様を拜し得るか否かは、明治天皇様が吾々にお遣し遊ばされたお薬を皆が頂戴するかせぬかにある。それと同じ心持を本多祝下に就ても感じます。世の中に人は澤山ありますけれども、第二の本多上人は見出し難いと思ひます。併し生意氣を言ふやうであります、門弟全部がそこに頭腦を注いで行きましたならば、本多上人のお遣し遊ばした教を皆が奉じて参りましたならば、本多上人ツククリ其の儘の人が必ず出て来て吾々を指導して下さる、吾々の志を完うすることが出来るだらうと

思ひます。さういふお方にお眼に懸ることが出来るのも出来ないのも、皆吾々の考如何に依るといふことを痛切に感じます。

まだいろ／＼申上げたい事がありますが時間もありませぬから此處には省略致します、唯私曾つて本多上人に對して「どうかあなたが此の世の中の思想界を矯す中心の働き手となつて戴きたい」といふことを申上げた事が遂に果し得ず、茲に失望したといふことは、本多殿下に對して何となく申譯ないやうな感じが致します。茲に之をお詫び致しまして私のお話の終りと致します。(完)

昭和六年三月本多上人病篤しとの電報に接し九州より歸京の途次讀める歌二首

甲斐かねをとさす雲こそ物憂けれ

病ぬる君を思ひ浮べて

わか旅をいつも朗らに迎へつる

富士も雲間に今日は陰れて

又

昭和六年三月本多上人病篤しと聞き杵築より中津に至る途次遂に宇佐八幡の御社を拜しつる甲斐もなく惜くも遷化せられければよめる挽歌一首及反歌四首

宇佐にます、八幡太神、皇の、國守る道を、知しめす、神にしまさば、日の本の、鎮と仰く、法の聲、朝な夕なに、唱へつゝ、國の姿の崩れ行く、さまを嘆かい、夜も日も、安らも得せず、打忘れ、骨をも身をも捧げつゝ、すめらみ民の、諸共に、踏むへき道を、教えつる、聖の身を、打忘れ、しばしなりとも、長がれと、護らぬ神の、あるべしや、萬の神の、心なく、世の行くさまを、夢と見む、ならひなりせば、言舉げむ、甲斐しなけれと、鎌倉に、在す八幡を諫めつゝ、後の世までも、法の爲め、たくひあらせす、功を、建てし聖の、言の葉を、如何に聞らん、人皆の、昔も今も、すめらべに、盡す心は、白妙の、雪より清き、和氣の君の、たてし教の、いや高く、なほいや遠に仰くべき、身にしあらなは、いましばし、あらましものを、國の爲、皇のみため、

いと惜き、聖の身を、神は知らずや、

反歌

いかならむ神の心のかくばかり

つれなきものか宇佐の大神

大神のみ手の力とめし給ふ

聖ともへと余波惜しけれ

余波惜しと思ふ心を引き返し

聖の道をいや清くせよ

いや清くするも皇の爲そかし

同じ心に進め斯道

日蓮聖人大師號宣下

日生上人

宮原六郎

統一記者より、日生上人追憶の所感を求められたるも、上人の信念學識人格及其功績等を語るべきは、世に幾多の人あり、門下の末輩たる私は之を遠慮す。然れども上人は、日蓮大聖人入滅後六百餘年間、幾多の先師が未だ爲し得ざりし、大師號宣下奏請運動

を起したる第一人にして、私は幸にも其運動開始の第一日に當り、上人に随伴し之に参加せるを以て、茲に其追憶を述べんとす。

時は大正十一年八月一日早朝、私は上人の招に依り、品川妙國寺に詣て、上人に拜顔す、上人曰く

日本の佛教は、推古天皇の攝政聖德太子に依りて

大に興隆せらる、今年は今上陛下の攝政殿下、國

政統理の第一年なるを以て、大に正法興隆の運動

を起さんが爲に、其第一歩として、我が日蓮大聖

人に對する大師號宣下を奏請せんとす。而して日

蓮大聖人の宗教運動は、立正安國、知法思國にし

て、即ち法と國との冥合を主旨とするを以て、先

づ政界名士の意見を問ふべく、本日其運動を開始

す、是れより大養毅君、加藤高明君及床次竹二郎

君の三氏を訪問せんとす、同行せられたし。

私は大に悦び上人に随伴して、三先生の意見を拜聽

するを得たり、第一に大養先生に面會して意見を求

む、先生は左の趣意を以て、卒直に賛成の意見を述

べられたり。

偉大なる日蓮聖人の高德と法勳とは、大師號の有

無に依り影響する所なし、然れども聖人は勤王愛國の宗教家なるを以て、皇室より其功績を旌表せらるゝは、大に感激する所なるべし。而して本年は、攝政殿下政治の第一年なるを以て、偉大なる宗教家にして且つ勤王愛國の國士たる日蓮聖人を旌表せらるゝは、攝政殿下 政治をして、一層光輝あらしむる所以なり、此の意味に於て、大師號宣下の奏請は、大に賛成する所なり。

私は此の徹底せる大養先生の卓見に敬服したり、尙ほ私は少壯の頃政界に進出せんと欲し、先生より指導を受けたる間柄なるを以て、奏請の手續等に關し先生の指導を求む、先生も亦隨意なく示教を與へられたるは、大に感謝する所なり。上人は其れより、加藤高明先生、床次竹二郎先生に面會して意見を求む、兩氏とも賛成の意を表せられたり、此の如くにして奏請運動の第一日は、良好なる結果を得たるなり。

次て日蓮門下各派管長及田中智學先生等の協力と、東郷元帥、井口、大迫兩陸軍大將、小笠原、佐藤兩海軍中將、矢野茂氏、木内重四郎氏等の賛同とに依り。

聖應院日生上人御本葬儀記

「聖者應生して群迷を度す」と、嗚呼 名既に體を顯す、「斯人」宿世に妙法に縁あり、道熏じ時熟して諸相淨らかなり、生れ乍らにして冥應其理必ず臻る、靈瑞感通して嘉名早く立てり、宜なる哉や、今「世間」に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしめ給ふ」是れ天成の聖者、一代の教傑、命世の導師、本化地涌の一大菩薩、是れ如來の遺す所として如來の事を行じ給ひし如來使聖應院日生上人本多大僧正現下、安詳として靈山の佛所に語り給ひし彌生の半ば十六日より正に二閏月茲に五月十六日、上人が三十餘年の長きに亘つて錫を留め、遂に御臨終入於深禪の靈場とは爲れりし鳳凰山妙國の淨刹に於て、遺族近縁門弟信徒、遠邇の道俗一會の大衆翕然として肅々整々たる裡に、靈骸葬送の儀は顯本法華宗宗葬の禮を以て嚴修せられたるなりき。

此日、夜來の激しき風雨は跡なく霽れて晴空一碧、天地は默してもの言はむとする乎、哀悼轉た深

り、同年九月十一日 文部大臣に奏請書の進達を請ひ、文部省は僅か三日間に其手續を終り、同月十四日宮内省に廻付せり、而して同年十月十三日、大聖人六百四十一年の忌日に當り、立正大師の諡號を宣下せられたるは、日蓮門下僧俗一般の大に感激する所なり。

此の如くにして我が日蓮大聖人に對し、大師號を宣下せられたるが、其奏請に對する第一の功勞者は、我が日生上人なり。吾等は大師號宣下の光榮を永久に記念せんが爲に、日生上人の指導と同志二千餘名の協力とに依り、大聖人の銅像を、大聖人の遺跡たる帝御郊外洗足池畔に建立せるが、此の銅像護持の爲に、財團法人立正會を設立し、私は其會務を執行すべき任に在るを以て、大師號宣下奏請運動の開始を追憶するは、寧ろ其の責任なるべきを痛感し、敢て所感の一端として之を陳述する次第なり。

日生上人宗葬記

けれども、さあれ又上人寂光の淨園にゐさせる遊行法樂の風光をしのぶには恰も是れ亦好しとやせん。午下一時嚮曉たる奏樂裡に儀は開かる、三寶禮讀經唱題散華、薰香堂奥に漲り靈感心底を蓋うてすゞろ大恩師上人の威貌温容をしのび參らするか……遺弟道友信徒來賓、肅然として恩師の御靈前に合掌燒香以て歎德哀弔の辭を捧げまつる。

- 一、歎德文 顯本法華宗管長 井村日成氏
 - 二、弔 辭 文部大臣 田中隆三氏
 - 三、弔 辭 國柱會總裁 田中智學氏
 - 四、弔 辭 日蓮宗管長 酒井日慎氏
 - 五、弔 辭 統一團代表 岩野直英氏
 - 六、弔 辭 統一團協贊會理事長 宮原六郎氏
 - 七、弔 辭 知法思國會代表 加藤文雄氏
 - 八、弔 辭 地明會代表 川原謹子氏
 - 九、弔 辭 東洋大學學長 中島德藏氏
 - 十、弔 辭 品川町長 大橋清太郎氏
 - 十一、弔 辭 妙國寺信徒總代 秋澤吉藏氏
 - 十二、辭 辭 文學博士 常盤大定氏
- 夫れ大恩師聖應院日生上人護法護國の大活動、功勳

彌高く其の業績枚擧に遑あらざるも、就中直接皇國にゆかりあるは、即ち大正の御宇十一年今上攝政の御時、高祖日蓮大聖人に勅賜立正大師諡號欽奏の議を起して朝廷之を宣下し給ふに至れると、更に次で昭和戊辰今上登極の大典に當り、至尊陛下恩師の功を賞し給ひて天盃を恩賜し給ひしの美事とならんか。是に隨ひて又此の時、政府は文部省の名に於て、恩師が多年の社會教化の功勳を讃せる表彰狀と共に御紋章附桐花研室を贈呈せるもの、されば茲を以て此日、乃ち又文相弔辭を寄す。今日の儀は即ち宗葬として之を行はれしも、世が世ならば固より國葬の禮を以て爲さるべきなりとは、具眼の士の齊しく稱ふる所、至言と謂つべし。我等は我が家國の未だ心靈界に目覺むるの遲きを悲むと同時に、轉た我等の使命の重大なるを痛感せずんばならじ。況んや感更に深きは、我が恩師と共に明治の聖世よりこのかた同じく本化の道統を掬ひて一意教法宣揚の爲めに辛酸艱難千軍萬馬の間を馳突し來りし教界の雄傑師子王道入田中智學居士が古稀に餘るの身を以て關西布教より態々馳せ來つて恩師の御靈前に弔辭を寄せ

られし事なりき。又此日恩師が御生前讀者の間に於ける幾多の道契中、信仰の學者として信賴厚かりし山田博士の、自ら持ち來られし精彩ある弔辭並に佐藤中將の挽歌を措くも遂に讀まるゝを得ざりしと、又更に宗教學界の耆宿たる恩師の知友姉崎文學博士が、忽卒の際會葬者多くして知るに由なく、堂外の廊下に法要の終る迄、立つて恭しく哀悼の意を表せられしとは、感激に堪へず、又床次、上原等諸名士の狹隘なる座席に詰められたるは甚だ遺憾にして各閣下に對して深く御寬恕を乞ふ所とやせん。當日各地の諸賢信徒等より弔電を寄せられしもの實に三百二十有餘通、尙更に恩師の御教化に與りし景慕欽仰の所化信士よりして恩師の御靈前に誦誦弔悼の文を捧げられし者轉た有之、茲に其の芳名を列ねむ

法學博士山田三良氏、海軍中將佐藤鐵太郎氏、大日本妙道會、大森妙道會、立正婦人會、本門法華宗、皇民會、大日本立正門下青年聯盟、大日本愛國義團代表松岡林造氏、大乘佛教會、中央佛教會、佛教聯合會本部、品川佛教會幹事横川得諄氏、ホルル妙法廣布會、帝都教育會會長伯爲松平賴壽氏、一徳

會長子爵高倉永則氏、東洋大學橋香會、京都統一團、京都市法華經講會、京都妙滿寺本山部長川崎英照氏、京都總本山妙滿寺信徒總代、神戸統一團、神戸統一團はちす婦人會、神戸法華經研究會々員一同、名古屋自慶會理事常樂寺檀徒總代豊田利三郎氏、立活映株式會社々長妹尾朝氏、陸軍少將細野辰雄氏、中村謙藏氏、猪又金太郎氏、統一團員川村善助氏、同師會河合勝明、等

恩師聖應院日生上人靈山の寶刹より莞爾として之を哀慈納受し給ひし事なるべし、嗚呼今や恩師大上人慈父大覺世尊のみ許にありて妙相莊嚴無上最勝の佛身を成就し給ひ三明六通慈眼明かに智慧慈悲功德微妙圓滿自受法樂衆生攝化遷りて我等を導き給ふ威徳深重自在の神力巍巍々堂々として尊高ならむ。

本堂御寶前に於ける肅然たる法要の儀は終りて次で此の淨刹の塋域に靈骨埋葬の儀を行ふ、塔婆の新たなるに記されたる恩師の御名見る者をしてそらる感深からしむ、生等門弟各々一握の土を捧げておくつきを造り參らす、香華もて周圍をかこみ一心に讀經唱題して法味を獻じ、恭しく合掌禮拜して最後

の別れをなし參らせぬ。あゝ今日迄は其名もゆかしき品川妙國寺に參らば、則ちかの御書齋に鞠躬如として恩師先生を尋ね參らせ微妙の教義法門の御諭を請ひ受け授けられ奉りつゝこよなき歡喜に打ひたりつるが、今や是より後は此の淨刹をおこなふ毎に、先づ詣づべきものは、此の師の君の、感涙も止まらぬおくつきのべに、いくその袂をうるほすらむあゝ……

此の日道場を嚴淨し香華を供養し寶壇を莊嚴しまつりし閣浮第一本門の大本尊のみ前なる恩師上人の御靈前には、かの名著恩師學生の名著たる「法華經講義」「大藏經要義」「聖訓要義」「開目抄詳解」「日蓮主義精要」等供へ捧げ奉りつゝ、あゝ我が師の君日生上人今やお姿を拜する術もなく、み聲を聞きまらするよすがもあらじを、み法求むる唯一の道は數々遺し下され給ひ此のいとゞ吉き御著述のみとはなりつ。まこと此のふみあまたの御教は恩師學生の熱血を籠めて魄を鑿に染めなしてものし給ひしもの、高祖日蓮大士の後始めて出でつる宗門不朽不滅の寶典、恩師自ら期せられつる如く、本化別頭の教觀に

沙門聖應院日生の御名、實にも其の御いさほし御譽れは宗門不滅のものにてこそ。あゝ此の我が師の君日生上人にいかなる宿世の契なるにや世を同じうして値遇し奉り、無上唯一絶對のたとしへなき賜たまひつる我が絶對的信仰絶對的恩師絶對的大恩……あゝあゝ……更に々々かの活潑なる大藏經要義は、そも曾て恩師自らのたまひつ「予が死せし時は、此の大藏經要義を靈前に供ふべきものか」と、あゝ學佛の君子明かに知れ、求道の人士審かに知れ、是れ大覺世尊の滅後月氏震旦日域三國三千年の佛教史上始めて此の大偉業の成るあるを聞く。夫れ天台は一切大藏經を周覽して法華に歸宗し、以て五時八教の判釋を立し、大化上行薩埵日蓮大士は一切大藏經を入眼點睛して全佛教の開顯統一本佛顯本の 大光明を掲げ、茲に絶對判の法幢を太虚に飄へし、沙門聖應院日生恩師は、又一切大藏經を周閱大觀して、七千の經卷悉く皆經王法華に朝宗すなる、淵極の玄宗旨致よりして、統一的佛教觀の大判釋を立て、佛教の正系と傍系とを分ちて現實と理想とを融節し、教行人理果の五法に亘りて藏圓相對の深旨を示さる、嗚呼

赫々明々堂々穆々、如來大覺の寶藏今其の秘鑰を得て扉は開かれつ、「光は東方より」……見よ世界人文永遠の大光明たる我が大聖釋尊の明教は是ぞ法界の秘奧、世界群籍の帝王、東亞の光、經王法華一實開顯の聖教なりと謂はん、全佛教醇要精粹の義門は齊しく茲に存し、佛教の神髓懸つて焉に在り。嗚呼此の洪業此の功績、本師釋迦牟尼世尊もさぞや我が意を得たりと莞爾として微笑し納受し哀感し冥助を垂れ給ひし事なるべし。今日葬送の御靈前に、曾ての師の遺訓をそのまゝに、此の大藏經要義を供へ奉る、恩師上人も亦莞爾として會心の笑を洩らし給ひしか、破顔微笑し給ひしなるか。是よ是恩師は一切卷成る毎に恭しく御寶前に告げ給ひ、又朝廷に獻納して法國冥合の一助に資し給ひしもの、否よ是こそ恩師自ら期し給ひつる、佛教の研鑽は此に依つて一新生面を開き、其の最高最深の正統中心を朗然として洞觀洞察し得て、必ずや今より後、道を如來のみ教に求め來る者争つて此の大藏經要義を繕き法華經講義を探り、あゝ、聖應院日生の御名は爾今我國否實に世界人類の口々に稱へ謳はるゝに至らむ。今

日は未だ時人覺る者少く、獨り超然時流に拔んじ給ひし遠謀の大先覺者聖應院日生師は、遙かに知己を千載の後に俟つて悠然として逝き給ひしも、向後恩師の没後日ならずして、世界人文の趨勢は必ずや大聖釋尊のみ教を渴するが如くに欣求憧憬するに至り、遂に日蓮大聖人法華顯本の教觀に邁趣向上せむ、即ち如從飢國來忽遇大王膳 飢をたる宇内幾萬の生靈をして無上甘露の醍醐味を滿喫餐受し鼓腹擊壤せしめむ、此時大覺寶藏の絶好指針として曠世の名撰述大藏經要義、頌徳日生上人の御名と動しは、渾圓球上普く東西求道の君子に依つて叫ばるゝに至らむ、嗚呼大恩師聖應院日生上人の御名これより漸く大なり來らむとす、實にや我等は其の魁たる乎あゝ幸なる哉 不肖敢て今日茲に之を豫言し明斷して後賢に贈る。

恩師よ、恩師は斯くの如かる大偉業を遺して今や安詳として靈山に行きまし給へり。恩師の洪業の猶遺れるもの無きに非ず、否とよ法統の愛護祖國文明の傳承こそ生等が一身雙肩に擔ふ所、然り實に恩師親ら生等に遺囑し給ひし所なりき。あゝ生等恩師の

大人格大偉業を前にして安んぞ躊躇逡巡するを得べき何すれど退轉墮落するを得べき、唯ひたすら一心に祈念誓願し奉る所は願はくは恩師の遺命に脊かざらむ事をなり願はくば恩師の遺命を辱しめざらむ事をなり、……師よ師の世にゐませし時は、生等放逸無慚の事ども多かりき、恩師は生等を究竟徹底して救はむとしてこそ涅槃を現じ給ひつれ「爲度衆生故 方便現涅槃 而實不滅度 常住此說法 我常住於此 以諸神通力 令顛倒衆生 雖近而不見」と——誠言皓々として我が心靈を照せり、恩師は實に生等を眞に救ひ給はんが爲めにこそ非滅に滅を現じて方便の涅槃に入り給ひぬるよ あゝ恩師は生きては我に唯一無上絶大の信仰を恵み給ひ、死しては今や、否死して身を隠し給ひてこそ成佛無礙の秘密神通之力を以て眞に我を救ひ給ふなり我を救ひ給へるなり 師よ師は常に教へ給ひき論し給ひき「釋尊も大聖人も先師先徳も悉く皆——我れ一人の爲めの佛の慈悲なりと思へ」と——垂訓切々我が心耳は澄めり矣 是此の妙旨是此の恩師が慈訓嚴誡は、あゝまこと唯我れ惇善の眞佛子のみ知る焉 さあれ師よあゝし

かあれど師に別れ参らせしこの嘆きなにかたごふべき あゝ懐ひは同じ かの娑羅雙樹拔提河 畔 慈父大覺世尊非滅現滅の砌、尊者阿難悶絶地に倒れて哀嘆號泣し嗚咽慟哭して稱へ奉りし「我は初生の嬰兒の如し 母を失へば久しからずして必ず當に死すべし 世尊よ如何ぞ放捨せられて 獨り三界を出でて安樂を受け給はんや 我れ今世尊に懺悔す佛に侍してよりことかた二十年 四威儀中に懈惰多し 大聖のみ心を悦可すること能はざりき 唯だ願はくば世尊大慈のみ光 一切の世界に我を攝受し給へ 痛ましい哉痛ましい哉説くべからず あゝ何ぞ能く聖恩を陳べむ」と、あゝ昔阿難が心境は圖らずも今日の生等が心境なるか……あゝ師よ我れ今恩師に慚愧し懺悔したてまつる 生等が不孝なりし失を許し給へ 恩師よ是より後はいよゝ生等門弟眞佛子に常に毎に哀感感應ましまし給ひて、生等を和樂淳善の地に導き覺らしめ安らはしめ給ひて、恩師の遺志恩師の遺業を祖述し紹繼し發揚なさしめ、以て恩師に上品第一の功德を供養なさしめ給へ、恩師無窮の大恩の千萬分の一分に報はしめ給

へ 恩師よ恩師への大孝を立てさしめ給へ 恩師が生等への最後の垂訓は「佛祖の教訓と日本文化建設の爲めに力して呉れよ、それが予の本懐である」と、あゝ生等恩師に導かれて——この度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬる我等淳善の眞佛子門弟は、斯の恩師いまはのきはのみ言葉を思うて感涙潸々 あゝ生等奈何ぞ感奮興起せざるべしや あゝ悲壯凜烈なる哉恩師の遺訓 生等は恩師の枕を誓ひぬ 恩師御臨終の枕に肅然「法統の愛護」を誓ひぬ 師よ師は「ウん宜しい 御苦勞」と あゝ師よ靈山にてみそなはしたまへ 師よ生等必ず誓を果したてまつる 師よこひねがはくば心安らかに思召したまへ

弘安五年十月十二日將に現滅の前夜に臨み日蓮上行薩埵はのたまふやう「靈山にて見るべし靈山にて見るべし」と あゝ恩師は今本佛釋尊日蓮大聖人もろゝ正義の先師先徳と共に靈山にこそはましますなるか 師よ師は日頃生等に教へ諭し給ひし「暮れ行く空の雲の色有明方の月の光までも心を催す思ひなる」本師世尊慈父のみ許に詣り給ひて、此の教訓

を身親ら生等に先だつて先づ如實に體達大悟し給ひしなるよ 師よ生等も亦當に應に師のみあとに倣ひ奉らむとす 師よ生等は恩師の遺訓を奉行して、現世には護法護國の大誓願を行じ臨終を期して速かに恩師のみ許に参り恩師に見え奉らむ恩師に見え奉らむ 師よ靈山にして我等を待ち下され居給へかし矣 維時昭和六年 高祖日蓮大聖人六百五十遠忌の辰 癸亥十六日 門弟眞佛子稽首稽首謹而白す

願本法華宗前管長大僧正本多日生師資性剛明ニシテ學識高邁風ニ職ヲ教育家ノ任ニ奉ジ義ニハ闡宗ノ輿望ヲ荷フテ管長ト爲リ在職實ニ二十有七年ノ長キニ及ビ以テ宗風ノ宣揚教學ノ興隆ニ盡瘁シ或ハ統一團ノ設立ヲ始メ幾多ノ團體ヲ結成シテ教化ノ振作ニ努メ使命ニ專念シテ一日モ渝ルコトナク其ノ功績甚ダ見ルベキモノアリ、方今教界内外ノ狀勢ハ師ノ活躍ヲ期待スルコト多大ナルニ天壽ヲ假サズ渣焉トシテ遷化セラル誠ニ哀悼ノ至リニ堪ヘズ茲ニ宗葬ヲ嚴修セラルルニ當リ微衷ヲ述ベテ弔意ヲ表ス 昭和六年五月十六日 文部大臣 田 中 隆 三

仰ぎ願はくば
南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛
南無本化上行日蓮大聖人
南無代々正義傳燈の諸大先師先徳別しては
南無聖應院日生上人
感應道交 哀感納受 神通御加被あらせ給へ
南無妙法蓮華經

嗚呼 聖應院日生上人
上人ノ遺ヲレタル芳躰高躅ハ光前照後遠邇ノ道俗齊シク欽仰スル所ナリ 若ウシテ既ニ宗門改革ノ鵬志ヲ懷キ布教所ヲ興シ統一團ヲ創ムル等夙ニ教界ノ先驅タルニ任ジ推サレテ願本法華宗管長トナルヤ在職正ニ二十七年入ツテハ克ク宗門ノ綱規ヲ肅正シテ

弔 辭

門弟 佛子 河合陟明謹而記す

弘通本位ノ宗是ヲ確立シ出デテハ克ク折伏ノ毒鼓ヲ擊拵シテ濁惡見慢ノ群萌ヲ警醒ス。統一閣ヲ開創シテハ法域經營ノ規矩ヲ垂レテ晴會地明會講妙會自慶會乃至知法思國會等ヲ設立シテハ或ハ別頭ノ法門ヲ布昭シテ法國冥合ノ玄旨ヲ闡キ或ハ東西ノ思想ヲ開顯シテ勞資雙榮ノ道法ヲ示ス。遊化四暢晝ハ暇ヲ止メ筆硯三昧夜ハ眠ヲ斷チ辯舌強據頑迷ヲ撒破シ文章勁峻正義ヲ高調シ意氣常々堂々乎トシテ斗牛ヲ貫クノ慨アリ。雄說萬座宏著等身光ヲ當代ニ發シテ澤ヲ後昆ニ布ク別シテ立正大師號ノ宣下ヲ奏請シテ追證ノ聖恩ニ浴セルハ上人愛國ノ至誠ニ基ク又本化門下ノ統合ニ盡瘁シテ各派ノ融歸ヲ謀レルハ上人愛宗ノ勢意ニ發ス。赫々タル教功遐ニ 寂聞ニ達シ

今ヤ人心ノ荒化其極ニ達シ邪謂百出妄見紛羅菽麥辨シ難ク邪正斷シ易カラズシテ世出俱ニ上人ノ知見教導ニ待ツベキモノ倍々多カラントス此ノ時ニ方リ上人渣ニ化ヲ他界ニ遷サレ天下忽チ遷信スル所ヲ衷フ哀憫痛惜何ゾ堪ヘン。上人享壽六十五敢テ中道ニシテ逝ケルモノト謂フ可カラザルモ日慎ノ七十七歳ナルニ比スレバ尙大ニ隔ツ所アリ。素是非滅現滅ノ相敢テ悲嘆スベキニ非ズト知ルト雖モ憂愁ノ雲自ラ胸ヲ蓋ヒ悲泣止ムコト能ハザルヲ奈何セム。本日葬送ニ際シ哀悼ノ涙更ニ新ナルモノアリ乃チ虔テ微香ヲ拈ジテ靈前ニ供ヘ恭シク上人ノ增圓妙道ヲ祈ル願ハクハ上人常住ノ大靈恒ニ法國ヲ衛護シテ遺德長ク後世ヲ潤シ錢香遍ク衆生ニ薰ゼムコトヲ

南無妙法蓮華經

維時昭和六年五月十六日 日蓮宗管長 酒井日慎

和南

弔辭

維レ昭和六年五月十六日、顯本法華宗前管長本多

日生上人ノ本葬儀舉行ニ際シ、道友智學馳到テ弔辭ヲ寶瓶ノ前ニ述フルハ、道誼ノ命スル所、特ニ上人ノ偉徳ヲ宣說シテ之ヲ天下後世ニ示サントスルモノアルニ由ル。

上人、天資剛毅、誠量高邁、義ヲ秉ルコト精明、事ヲ決スルコト果斷、法勳古今ニ卓ク、天下英風ヲ仰グ、道俗ヲ舉ケテ上人ノ遷化ヲ哀惜セザルモノナシ。惟フニ、上人一代ヲ通ジテ、弘法施設ノ功績枚舉ニ遑アラズト雖モ、殊ニ丕績ノ千古ニ輝クモノニアリ。

初メ、上人野ニ在リ宗風ノ醇正ヲ倡ヘテ屬セズ、偶々格言問題ノ起ルニ會シ、當局ノ賢明、克ク私情ヲ捐テ、上人ヲ起用ス、蟄龍一タビ雲雨ヲ得テ天ニ昇化スルヤ、法雨沛然トシテ率土ヲ洽ス。幾クモナク推サレテ管長トナリ、一宗ヲ統理スルニ及ビ、斷然トシテ勸請ノ雜亂ヲ排シ、信行ノ妄謂ヲ糺ス。天下風ヲ開テ肅然タリ、洵ニ千古ノ英斷ト謂フベシ。是レ光輝アル法勳ノ一ナリ。又上人夙ニ本化門下各派分裂ノ現状ヲ慨シ、統合歸一ノ途ヲ拓カントシ

テ、循々勸說シテ一タビ統合ノ同盟ヲ策ス。然レドモ因習ノ固ク久シキ、理融シテ情融スルニ至ラズ。惜イカナ半途ニシテ進展ヲ阻シ、雄圖空テク一歩ニ歸シタレドモ、大義既ニ端ヲ啓ク、後世ノノ圓熟ヲ見ンコト必セリ。他日倘シ統合融歸ノ春ヲ迎ヘン時、天下復タ上人播種ノ功ヲ仰グニ至ルベキヲ疑ハズ。是レ法勳ノ第二ナリ。又上人恒ニ法國ノ冥合ヲ念トシ、國家ヲシテ一タビ公的承認ノ下ニ、本化大聖ノ教功ヲ刻スル所アラシメムトシテ、大師號勸諭欽奏ノ議ヲ起シ、朝野ノ名士ト諸リ各派ノ管長ヲ促シテ、之ヲ 闕下ニ伏奏シ、遂ニ立正大師徽號ノ勅諭ヲ拜スルニ至ル。實ニ是レ法國冥合ノ第一歩ヲ印スルモノト謂フベシ。是レ上人法勳ノ第三ニシテ尤モ後代ニ光輝アルモノ是ナリ。

夫レ教壇拂ヲ執ルモノ百世何ゾ限ラム。而モ法功一代ニ高ク、化澤千古ニ昭々タル、上人ノ如キ果シテ幾人カアル。上人若シ十歳ノ壽ヲ延ベ、予ガ殘命猶十年ヲ支ヘ得テ、幸ニ京都ノ盟契ヲ實現セバ、教團ノ統合宗風ノ宣揚ニ資スル所アルベカリシニ、惜イ哉上人予等ヲ棄テ、寂光ノ雲ニ入ル。今寶瓶ノ

前ニ立テ感慨窮マリ無シ。然レドモ本化正信ノ誓ハ不退轉ナリ、予年齒朽邁、風露ノ歎身ニ逼レドモ、筆獨ヲ鼓シテ精進セン。上人既ニ德行ヲ完フシテ深禪ニ入ル。逝テ悔ナキニ似タリ。願ハクハ誓願餘力、吾等ヲ冥護シテ、新道興隆ノ前途ヲ加被シタマヘ。敢テ上人ノ英靈ニ告ゲテ弔辭トナス

南無妙法蓮華經

昭和六年五月十六日

師子王道人智學

敬白

弔辭

顯本法華宗前管長大僧正本多日生上人 客年病ヲ得テ靜養中途ニ起タズ去ル三月十六日寂然トシテ遷化セラレ

上人ガ其ノ學殖識見辯說ニ於テ一世ニ卓越シ特ニ其ノ人物材幹ニ於テ明治大正年間ニ於ケル不世出ノ偉材トシテ瞻仰セラレタルハ夙ニ何人モ熟知スル所ナリ 明治三十五年上人ハ一宗ノ輿望ヲ負フテ管長ノ職ニ就カルルヤ宗風ノ刷新寺門ノ整理宗規宗則ノ

佛三教ノ融合ヲ計リ内ニハ八派九教團ノ統合ヲ期スル等常ニ至誠ノ躍動シテ止マザルモノアリキ教團統合ノ大業モ不幸ニシテ好事魔障多ク其ノ實現ヲ見ルニ至ラザリシト雖モ上人ノ至誠ト卓見トハ長ヘニ没スベカラズ

吾等如何ナル宿縁有リテカ此師ニ值遇シテ初メテ佛法ニ結縁シ其ノ法乳ニ育マルモノ茲ニ年アリ不肖自ラ拙ラズ往年同志相謀リ法華會ヲ創立シテ聊カ教界ニ貢獻セントスルニ至レルモ上人ノ慈愍ト提撕トニ負フ所尤モ大ナリ爾來予ガ上人ニ對シテ眞ニ懷仰ニ堪ヘザルモノ鮮シトセズ

上人ハ普通常人ト異ラザル人間性ノ間ニ一面水火ニモ犯サレザル純乎タル信念ヲ懷キ絶エズ佛道ヲ求メ日夕釋尊ニ面伏シテ之ニ仕フルノ思ヲ忘レズ治ク衆生ヲシテ佛ノ慈悲乘ニ乘ゼシムルヲ以テ念願トス

又ヨク他人ノ美點ヲ發見シ之ヲ稱揚シテ養マルル所ナク眞理ハ飽マデ之ヲ天下ノ眞理トシテ曾テ一點モ私セラルルコトナク且他人ノ供養ヲ受クル毎ニ深キ自省ト懺悔トヲ感ジラレタルガ如キ常ニ道心脈々

改廢等ソノ經綸ノ見ルベキモノ多ク殊ニ宗義ノ宣揚ト社會教化ノ運動トハ上人ノ主力ヲ傾注セラレタル所ナリ 上人ハ夙ニ繁嶺教學ノ陋ヲ厭ウテ直接世道人心ヲ指導スベキ宗義ノ檢討ニ努メ又目前ニ煩悶悞惱セル無數ノ生靈ヲ救済スルヲ以テ己カ任トナシ或ハ講演ニ或ハ文書傳道ニ止暇斷眠殆ド席温マルノ邊ナカリキ 上人ノ教化ニ浴シテ正法ニ值遇シ法悅歡喜ノ中ニ再生シ更ニ進ンデ無上菩提ヲ欣求スルニ至レル者擧ゲテ數フベカラザルハ誠ニ偶然ニ非ルナリ而テ曩ニ上人ガ同信ノ士ヲ糾合シテ天晴會ヲ起シ又地明會ヲ創立シテ專ラ信仰ノ喚起ト社會教化トニ盡瘁セラレタルハ今尙世人ノ記憶ニ新タナル所ナリ

由來踟躕タル教團ノ範圍ニ限ラレタル法華經主義ヲ明治大正以降廣ク天下民衆ヲ指導トシテ發揚セル功績ハ實ニ上人其ノ第一人者タリ日蓮主義興隆ノ今日アル所以ノモノ洵ニ上人一代ノ功業ニ負フ所甚大ナリト謂ハザルベカラズ

上人ハ法華開顯ノ妙旨ニ基キ諸教ヲ統一シ眞ニ四海歸妙ノ理想ヲ當代ニ實現セント欲シテ外ニハ神儒

トシテ願行不退ノ心境ヲ想見セシムルモノアリ 命且夕ニ迫レル刹那マデ口ニセラル、所ハ唯法統愛護ノ精神ノミ 洵ニ上人ノ存在ハ曉天ノ星末世澆季ノ燈明ナリキ、而テ巨星今ヤ隕チ教界寂寞ノ感ニ禁ヘズ 上人ヲ圍繞セル求道ノ士豈然トシテ續ノ乳ヲ思フガ如ク 吾等亦多年ノ道契ヲ失フテ思慕ノ情轉切ナルヲ覺ユ 嗚呼悲哉 茲ニ本葬ノ式典ニ臨ミ聊カ上人ノ生前ヲ回顧シ謹テ報恩謝德ノ微衷ヲ表ス

昭和六年五月十六日

正三位勳一等 法學博士

山田 三良

敬白

弔詞

思想國難 政治國難 經濟國難ノ時局ニ際シ、日蓮大聖人六百五十年ノ遠志ヲ迎フ、吾等ノ恩師日生上人ハ、大聖人遠志記念ノ爲ニ、三十餘年間心血ヲ結晶シテ經營セル統一團ノ根底ヲ鞏固ニシ、日本文化ノ精髓ヲ發揚シ、佛祖ノ法統ヲ擁護スヘキ、有力ナル團體タラシメ、時局對應ノ活動ヲ起スヘク諸般

編輯室より

◎四月のある夕、聖應院日生上人の御眞骨の前に、一心に合掌唱題しつゝあつた時、フット直感的に頭顱に響いた事がありました。日生上人御存生中には宗教界は云はずもがな、教育界にも軍人界にも、産業界にも、官海の邊にも社會の有ゆる方面に幾多の知己を有て居られた。

夫等の諸名士が、日生上人の御遷化に對して、どんな御感じを述べたか。古語にも一死一生知交情といふ。早速お訪ね致し其お心持ちを頂くべしとの觀念を催しました。然るに今日の場合、とてもその餘暇が得られない爲め、甚だ乍勝手特に御緊要中から懸々御寄稿をお願ひ申し、有難いことに只今の追悼號として、日生上人の御靈前に捧ぐる事が出来ました。これは偏に各位の賜物であると同時に、日生上人の御冥護と深く深く感銘致す次第であります。

◎本月は前號の續篇である日生上人の『日蓮主義の特色』を休載したことをお許し願ひます、其他各地の教報やら記事も次第に傳らして頂きますから御諒察あらんことを。

◎七月號からは『日生上人を憶ふ』の欄を設けまして皆さんのお心付きになつてゐる日生上人の逸話なり、上人からの御教信なり、其他の題目にかまわしい御投稿をお願ひ申上て置ます。

◎關原大藏省書記官から、聖應院日生聖人を憶ふの玉稿入手が存外手取りまして、追悼號に掲げさせて頂けず七月號となつたのは返す返す遺憾でありました。

◎初夏の朝り霞間は明るく着物は薄く軽くなりましたが、私共の心は暗いやうな、濃しい重苦しい又冷かさを感じます。併し日生上人の遺訓を守つて大に奮馬に鞭うちませう。(滿生)

ノ計畫ヲ立テラレシヲ以テ、吾等同志ハ其事業ニ協力スル爲メ、上人ノ旨ヲ承ケ、統一團協賛會ヲ設立セリ、而シテ本年四月八日、佛祖ノ降誕記念日ヲトシ、其計畫ヲ發表シ、實行運動ノ第一歩ヲ進メントスルニ際シ、上人ノ遷化ニ遇フ、誠ニ哀惜ノ情ニ堪ヘサルナリ、然リト雖モ時局ノ困難ト正法興隆ノ急務トハ、徒ラニ悲痛ノ涙ニノミ經過スヘキニ非ス、吾等同志ハ異體同心ト爲リテ、上人ノ遺志ヲ繼キ、近ク其實行ヲ開始シ、本會設立ノ趣旨ヲ實現スヘク勇猛ニ精進シ、法ノ爲メ國ノ爲メ一切衆生ノ爲ニ、統一團ノ基礎ヲ確立シ、漸次事業ヲ進展シテ、研究上ノ設備布教上ノ施設ヲ完成センコトヲ誓フ、上人ノ英靈庶幾クハ、寂光ノ本土ヨリ吾等ノ事業ヲ指導セラレ、其目的ヲ達成セシムヘク、冥護ヲ垂レ給ハシコトヲ

南無妙法蓮華經

昭和六年五月十六日

統一團協賛會

理事長 宮原六郎

絶好の機會!

大僧正故本多親下最近の名著四種左の通り特價提供す
吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

- 一 法華經要義
定價 金 參 圓
送料 十 四 錢
- 一 日蓮主義心髓
定價 金壹圓八拾錢
送料 十 錢
- 一 日蓮主義精要
定價 金參圓五拾錢
送料 十 六 錢
- 一 日蓮主義本領
定價 金貳圓五拾錢
送料 十 二 錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引 送料は實費を申受く

申込所

東京市外南品川町妙國寺内

「教」發行所
電話東京一〇九四〇番

料告廣一統			
四	半	一	表
分	頁	頁	派
一	頁	頁	一
頁	金	金	頁
金	五	九	拾
五	圓	圓	圓
圓	圓	圓	圓
事	之	金	前

價定一統			
一	半	一	冊
ヶ	ヶ	ヶ	冊
年	年	年	冊
金	金	金	貳拾錢
貳	圓	貳	拾錢
圓	貳	拾	錢
送	料	送	料
料	天	料	天
事	之	金	前

昭和六年五月廿四日印刷納本
昭和六年六月一日發行 (第四百三十五號)

製復許不

編輯兼 神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地一四八
發行人 磯部 滿 事
印刷人 鈴木 日 蓮
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所 都 都 印 刷 所
電話高輪六〇二四番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 統 一 發 行 所
電話東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

- 日蓮主義の特色(下篇)……………故本多日生
- 如來理想の展望と其實現……………和賀義見
- 日生上人を憶ふ(其一)
- 記 事
- 各地教報及通信
- 誌料領收

第三十六年七月號

統

